
FRAUD CALM -head-

早村友裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F R A U D C A L M - h e a d -

【Zコード】

Z3875D

【作者名】

早村友裕

【あらすじ】

戦争が終結してから6ヶ月、家族を失った自分は小さな街のはずれで一人暮らしていた。ところがある日隣に若い夫婦が越してくる。そして、反対隣の家の男性と出逢った時、運命の物語は少しずつ目覚め始める。

- - - はじまり - - -

ほんの1年前、この土地を支配していたのは魔界に住む悪魔たちを崇拜する『グリモワール王国』だった。

大陸西岸の豊かな平野と内陸部の高原、南の沿岸部と北の山地にわたる広大な国土を有する巨大な国家は、黒有翼獅子を紋章に掲げ、『レメゲトン』と呼ばれる天文学者を抱えていた。

『レメゲトン』は魔界の悪魔を召還し、その人知を超えた力を行使する天文学者のことだ。王国創立当時は72の悪魔をそれぞれ使役する72の天文学者たちがいたのだが、数百年の時が流れ、『レメゲトン』の名を頂く天文学者はわずか数名にまで減少していた。

その隣には天使を崇拜する国、セフィロトが在った。純白の羽根の乙女を紋章に戴く光の王国には、天使を召還する10人の神官『セフィラ』がいた。

『セフィラ』は天使の力でもって、グリモワール国の『レメゲトン』に対抗した。

もともと天使と悪魔という相対するものを崇拜していた両国の関係は長い間緊張状態にあった。

そして2年前にとうとうその均衡は崩れ、戦争が勃発した。

ほんの2年にも満たない短い期間の、しかし非常に激しく凄惨なその戦闘でグリモワール王国は『レメゲトン』をはじめとしたほとんどの戦力を失い、降伏を決めた。

現在この大地の指揮権を持つのは天界の天使たちを崇拜するセフ
イロト国である。

これは、平和なある街の片隅から始まるお話。
世界の理^{じとわり}を巻き込むことになる壮大な物語の『序章』でしかない
このお話は動き出す時を待つて静かに、静かに眠っていた。

隣に若い夫婦が引っ越してきた。

新婚なのだろう、二人は互いを慈しみながら少ない荷物で引越し
をした。身寄りもないのか、手伝いや祝いの人の影も見当たらない。
ずっと空き家だった丸太組みの家は、冬になれば雪も見られるこ
の付近では標準的な造りだつた。頑丈に組まれた木々は冷たい風を
防ぐだろうし、夏になれば暑さを和らげてくれるだろう。一階もない
い小ぢんまりとした家は、まだ子供もない夫婦が住むにはちょうど
いい大きさだった。

かく言つ自分もほんの3ヶ月前から小さな丸太小屋で暮らし始めたばかりだ。入つてすぐのリビング・キッチンを除けば奥に寝室と
書斎があるだけの簡素な家。飾る絵画も花瓶のひとつもない。装飾
と呼べるのは、入り口の扉に掛けた鏡が一つだけ。

前庭に作られた畠の世話と、ほんの少し歩いたところにある街の
人々との交流を繰り返す。

そんな穏やかな生活を送っていた。

夫婦が引っ越ししてきた次の日の朝、ドアのノックに答えて扉を開けると、隣に越してきた夫婦が揃つて挨拶に訪れてくれていた。

その一人の姿を見て、思わず声を失う。

目を見張るような美男美女だったからだ。

すらりと背の高い金髪の男性は、街で歩けば100人中10人が振り返るであろう美丈夫だ。整った顔立ちは柔らかな笑みを湛えており、取つき難さを払拭していた。光の加護を受けたかのような美貌に釘付けになった。

アメジスト

妻と思われる女性は澄んだ紫水晶の大きな瞳が愛らしい小顔の美女だった。柔らかそうに波打つこげ茶の髪をアップにし、銀の髪留めでとめている。その微笑みはすべての人々に癒しを与えるだろう。一人並んだ姿はこと別世界にあるようで、息を呑むほどだった。絵画の中からそのまま抜け出してきた王子様とお姫様のようだ。

その美しい女性は、自分の顔を見るなりまるで泣きそうな顔をした。

「何で？ この女性とは初対面なのに。

思わず眉を寄せる。

「どうしたの？」

そう聞いたが、女性はふるふると首を振つて黙り込んでしまった。困惑して首を傾げると、夫と思われる男性の腕をぎゅっと握り締めて俯いてしまった。

その様子に肩をすくめると、金髪に緑翠の美丈夫が自分に向かってにこりと微笑んだ。すべての女性を虜にする爽やかな笑顔で。

「初めてまして。昨日隣に越してきたフォーレスです。クラウド・フォーレス。こちらは妻のダイアナ」

「この男性は声も聞き惚れるようなテノールだ。

「あ、初めてまして」

思いがけず丁寧な挨拶を受けて、少し驚いたが、すぐに頭を下げた。

「まだこの辺りは詳しくなくてね。街の人々にもまた挨拶に伺おう

と思つよ」

クラウド、と名乗つた男性はそう言つた。

「IJの街はみんな氣のいい人ばかりだから、すぐに仲良くなれる」と思つよ」

笑い返すと、クラウドさんの奥さんダイアナさんがまた泣きそつた顔をしてこちらを向いた。

自分はそんなにも怖い顔をしているだらうか。

「……どうしたの、だいじょうぶ?」

「いえ、大丈夫よ。何でもないの」

ふるふると首を振つたが、大きな紫の瞳がうるうるしている。首をかしげながらも手を差し出した。

「わたしはグレイシャー＝グリフィス。わたしも3ヶ月前にここに着たばかりだから分からない事も多いんだけど……これからよろしくお願いします、ダイアナさん、クラウドさん」

「よろしく……グレイシャー」

握り返してくれたダイアナさんの手はとても柔らかくて……温かかった。

SECT・1 ウォルジエンガ＝ロータス

隣に越してきたフォーレス夫妻が帰つてから扉に掛けられた鏡で確認する。

奥さん、つまりダイアナさんが泣きそうになるほど怖い顔をしていただろうか？

二重の大きな眼におさまる漆黒の瞳はいつもの通りだし、艶やかな漆黒の髪も爆発しているわけでもなくまつすぐ胸の辺りまで落ちている。容姿には恵まれたといわれる年の割に少しばかり幼い顔は少なくとも目を背けるほど醜くないはずだ。

にこり、と鏡に向かつて笑つてみる。

鏡の中には20歳ほどの女性がこちらに向かつて微笑んでいた。

「わたし、怖い？」

問い合わせてみる。

もちろん返事はない。

次に会う時は満面の笑みで接する事にしよう。

そう心に決めて、頷いた。

隣に住むダイアナさんと二人揃つて街に買い物に行くのが日課になるまでそう時間はかからなかった。

最初にあつた時に見せた悲しそうな顔はあれつきり見られなかつた。

それどころかダイアナさんは見た目どおりとても優しい女性で、穏やかな口調と柔らかな物腰はどこか育ちのよさを感じさせた。もしかすると戦争で地位を失つたグリモワールの貴族かもしれない。

クラウドさんは家の隣にもう一つ小屋を作つていた。剣術に優れた彼はそこで道場を開き、街の子達を招いて剣術を教えるつもりらしかつた。

最近では街のヒトたちも手が空いた時に小屋の建築を手伝いに来てくれている。この分ならおそらく夏には道場が完成する事だろう。「グレイス、貴方の家の向こう側にも誰か住んでいるでしょう? どんな方が住んでらっしゃるか分かる?」

ある日彼女は唐突にそう言つた。

そう、自分の家の左隣はクラウドさんとダイアナさんの夫妻が住んでいるのだが、その反対側にももう一つ家があつた。

まるで自分の家と対に作られた、そつくりに小さな丸太小屋。きっと内装も同じなんだろうが、その前庭に広がる畠は全く手入れされておらず、一目で雑草と分かる植物群が生い茂つていた。

果たしてヒトが住んでいるのかどうかが怪しくらいだ。

「んー、実は見たことないんだ。本当に住んでるのかな?」

「ふふ、じゃあお邪魔してみよつかしら? せつかく近くに住んでいるんですもの、仲良くならないと損じやない?」

ダイアナさんの笑顔は無敵だ。絶対に断れるわけがない。まるで全てを照らし出す太陽のように。

つられて微笑んで、こくりと頷いた。

手土産にと、家にあつた桃をいくつか持つて正午過ぎにその家の扉をノックした。

自分がここに引っ越ししてきたのは、記憶に新しい先日の戦争でグリモワール国が降伏を決めた3ヶ月後のこと。今から、3ヶ月前のことだ。つまりこの土地がセフィロト国に支配されるようになつて半年が経つたという事になる。

戦争でカトランジエという小さな街の家族をすべて失い、以前親類が住んでいたこの街はずれの小屋に身を隠すように移ってきたのだった。

戦争前後の記憶は曖昧だが、おそらく悲惨な目に遭つたんだろう。自分の体には傷跡が多く残されていた。

特に背の逆十字傷は肩甲骨の下を横断し、首から腰の辺りにまでかかる大きなもので、今でも夜中に痛む事さえある。他にも左胸の辺りに貫かれたような生々しい傷や左腕の肘にもつぎはぎの様な傷跡が残っていた。

また、左手の甲は焼き付けたような赤黒い血管が浮かび上がる状態で、それを隠すためにいつも左手には手袋を嵌めるようにしていた。

覚えているのはとてもやさしい母の影 美しい金色のストレートブロンドと猫のような金の瞳。とても穏やかな時の流れの中、二人で幸せな生活を送っていた事だけ。

そのヒトを戦争で失つて、自分は逃げるようになってしまった。あの戦争で大切なヒトを失つたのは自分だけじゃない。きっと多くのヒトたちが心に深い傷を負つたはずだ。
もしかするとダイアナさんやクラウドさんも、これから会おうとしている隣の家のヒトも。

何度もノックをすると、扉の向こうから返事が返ってきた。

「どちら様ですか？」

そして、すぐに木の扉が開いた。家の主がゆっくりと向こうから姿を現す。

ダイアナさんがいつものようににこりと微笑んだ。

「初めてまして、向こうに引っ越してきたダイアナ＝フォーレスと言います。『挨拶に伺つたのですが』

「あ、ああ……『丁寧にありがとうございます』

ひどく不機嫌そうな男性が姿を現した。

扉の上に頭をぶつけそうなくらいに背の高いヒトだ。すらりと引き締まつた体躯を黒衣に包んでいた。

驚いて見上げると、透き通つた紫水晶が見下ろしていた。
アメジスト

その瞬間、心臓が跳ね上がった。

耳元で鼓動が響いている。

驚くほど端正な男性の容貌にも息を呑んだが、何より切れ長の眼におさまる紫の瞳に釘付けになった。まるで夜明けの空のよつて、光と闇を一度に集めた深い色。

どうしてだろう。

胸がきつく締め付けられた。心が悲鳴を上げている。震えるほど熱い感情が自分の中からあふれ出してきた。紫水晶から田^{アメジスト}が離せない。

何故だろう。

嬉しくて嬉しくて仕方ない。歓喜の湧き上がる心は今すぐにでも弾け飛びそうなくらいに躍っていた。

しかし……

「何でかな」

鼻の奥がツンとした。

間をおかず涙がこぼれてくる。

紫色が滲んでいく。

「あなたを見ると、すごく悲しい事を思い出しそうな気がするよ」目の前にいるこの男性以外の何もかもが見えなくなつた。

初対面のこのヒトがどうしてこんなに自分に大きな感情を与えたのか、どうして突然涙が溢れたのか、どうして今すぐこのヒトの胸に飛び込んで泣きたいのか。

何も分からなかつたけれど。

ただ涙を流す頬に目の前にいる紫の瞳の男性がふと手を伸ばし、涙を拭つていった。何度も何度も、優しく撫でていく。

それは、ずっと探していた温かい手。

自分の中の何かが叫んでいる。このヒトをずっと探していたんだと。

頬に当たられた手に手を重ね、ただただ涙を流し続けた。

が、じばりくして唐突にはつとした。

よく考えてみればこの男性とは初対面なのだ！

ぱつと手をほどいて離れる。

心臓がどきどき鳴り響いている。

切れ長の目を歪めて、男性は困惑した表情でこちらを見ていた。改めて観察してみても、この男性は美しかった。まるで悪魔に愛されているかのように整えられた顔立ち。宝石のような紫の瞳が漆黒の髪によく似合っている。

ずいぶん見上げる位置にある男性の眉間にきゅっと皺が寄った。唇が動いて、深いバリトンが零れる。

「お前……誰だ」

思わず言葉に詰まつた。

慌てて腕で涙を拭つて目を逸らした。

早口で告げる。

「わたしはグレイシャー＝グリフィス。この家の隣に住んでるんだ」ちらりと男性の顔を見上げると、非常に不機嫌な顔で見下ろしていた。眉間に皺が寄っている。もともと切れ長であまり愛想がいいとは言えないのに、さらに無愛想具合が増している。

その上、その男性はあきれたような口調でこう言つて放つた。

「挨拶する時は人の目を見ると齧わなかつたのか？」

先ほどまで胸の内を支配していた熱い感情はどうやらひらめつとして唇を尖らせた。

「まだ名乗つてもないヒトに言われたくないよ
思わず言い返していた。

すると男性はため息をつかんばかりの勢いで言い放つた。

「俺はウォルジエンガ＝ロータス。街で酒場の店主をやつている。ついでに言つと朝帰りで寝ていたところを叩き起こされて非常に機嫌が悪いんだ。分かるか？」

「だからってシツレイじゃない？　わたしは何も悪い事していないの

「…」

「じゃあ今度お前を夜中に引き起しちゃうから覚悟しておけ」

信じられない、何このヒート…

もつ一度言に返そつとしたとき、隣にいたダイアナさんがたしなめた。

「まあまあグレイス、今日は私達が悪いわ。日を改めましょっ仕方ない。ダイアナさんがそう言つのなら。

安眠妨害を詫びてその男性の家を後にした。

が、どうしてもある紫の瞳が瞼の裏に焼きついて消えてくれなかつた。

SECT・2 リティアルド＝ピーシス

隣に住むウォルジエンガ＝ロータスという男性の家を訪れたその日の晩、ダイアナさんとクラウドさんの3人で彼が営むという酒場に向かつた。

噂には聞いた事がある。

つい最近飲み屋街に出来た新しい酒場は、店主が見目麗しい男性だつたため街中の女性たちを虜にしているらしい。一ヶ月ほど前に越してきたクラウドさんと人気を一分しているとの事だつた……あくまで噂だが。

自分たちの家がある街外れからはほんの少し歩けば飲み屋街に到着する。

客引きの女性たちがクラウドさんに声を掛けてくるが、彼は穏やかな笑みですべてかわしていった。隣にいる奥さんのダイアナさんもその女性たちを遠ざけるのに一役買っているだろう。月明かりの元で見る彼女は燐光を帯びるように美しい。淡い水色のワンピースに身を包み、ベージュのケープを羽織ったダイアナさんは、静かな初夏の夜に舞い降りた悪魔のようにヒトから離れた麗を保っていた。薄暗い通りに並ぶ店の窓から賑やかな声と橙色の光が漏れている。暑くはない、かといって肌寒いわけではない快適な気候だ。

「ウォルジエンガ＝ロータスと言つていたね。どんな人だったのかな？」

昼間ずっと丸太小屋を組む作業をした時のまま、作業用ズボンとゆるいノースリーブを着たクラウドさんが問う。それでも彼の魅力は全く失われないし、それどころか意外なほど鍛え上げられた腕が露になつているのでは余計に人目を惹くのではないかと思つ。

間髪いれずに答えた。

「すごく意地悪なヒトだったよ。夜中に叩き起こすつて言つしさー！」

そう言つて頬を膨らますと、クラウドさんは困ったように笑つた。

「ええと、状況がよく分からんだけれど……どうしてそんな事に？」

「お仕事が遅かったのに起こしてしまったから怒ってしまったの。寝ていたところを起こされて不機嫌だったのね……それにしたって意地つ張りなんだから」

ダイアナさんの口調に、引っかかるところがあつた。

「あのヒトと……ウォルジエンガさんと知り合いだつたの？」

意地つ張りなんだから 幼馴染にでも向けるような親しげな口調だつた。何故か心のうちがざわめく。

ダイアナさんは微笑んで首を横に振つた。

「いいえ、初めてよ。グレイス、貴方と同じ」

「そう？」

「それを言つなら貴方こそ、まるで彼に会いたくて会いたくて仕方がなかつたように見えたわよ？」

「……」

「そうなのだ。

あの紫の瞳を見た途端、胸のうちで大きく何かが悲鳴を上げたのだ。ずっとずっと捜し求めていたヒトにようやくめぐり合えた感覺。何故だろう。初めて会つたはずなのに、自分でも理解できない感情が溢れて止まらなくなり、こらえきれずに涙が零れた。

「わかんないけど、あのヒトを見てたらすぐ悲しい事思い出しそうな気がするんだ」

もしかすると記憶が曖昧な戦争の間にどこかで見かけたのかもしれない。まったく覚えていないが悲惨な目にあつたときの記憶と関係あるのかもしぬなかつた。

「そうか」

クラウドさんは優しい翡翠の瞳で見下ろして、ぽん、と頭に手を置いてくれた。

「悲しい事なら思い出さなくともいい。忘れる、ところは一種の自己防衛だからね、わざわざ思い出しても君が傷つくことはない」

「そうよ、グレイス。あなたはこれからを幸せに生きるの。それが一番大切なのよ。」

「この夫婦はとても優しい。

自分とそんなに年は変わらないはずなのに、まるで父親と母親に対するような安心を感じていた。初めて会つた時からずっと、守られている事をひしひしと感じる。

もしかすると、このヒートたちとも戦争中に会つて居るのかも知れない。

だつてダイアナさんは初対面で泣きそうな顔をしていたのだから。自分があの男性に初めて会つた時そつだつたよ。

全く覚えていないけれど、もしかすると

ふとクラウドさんを見上げると、彼はにこりと微笑んだ。

「ほら、着いたよ。ここが彼の店だ」

田の前に、笑い声と明るい光が漏れる店が佇んでいた。

薄暗くて全景はよく分からぬが、上の階もあるだらう、宿も併設しているのかも知れない。

クラウドさんが薄い板の扉を開けると、女性たちのけたたましい笑い声が耳に突き刺さつた。同時に酒場独特の湿っぽく生暖かい空気が湧き出してくる。

そして、次の瞬間には悲鳴のような歓声が沸きあがつた。それがクラウドさんの登場によるものだというのはすぐに分かる。店の中から幾つもの手が伸びてきてクラウドさんを店の中に引きずり込んだ。

「あらあら」

たちまち幾人もの女性に取り囲まれてしまつた夫を見て、ダイアナさんはころころと笑う。

幾つもの明かりで照らし出された店内は、表から想像したよりずっと狭かつた。もしかするとそれは店内にひしめく女性客のせいかもしけないが。

10脚ほどあるカウンターは満席。さらに椅子に座らず立つている女性も合わせれば20人ほどが狭そうに肩を並べている。それだけなく3つほどあるテーブル席もヒトであふれていた。

そのうち中央のいちばん大きなテーブルにクラウドさんが埋もれるように座っていた。かすかにその笑顔が引きつっているのは気のせいではないだろう。それでも微笑みを崩さないのは天晴れと言つべきだ。

隣のダイアナさんと顔を見合させてから恐る恐る店内に足を踏み入れた。

香水の匂いとお酒の匂いが立ち込める。一瞬足を止めたが、ダイアナさんに続いてゆっくりと足を進める。

すると、この喧騒の中でもひときわ響く素つ頓狂な壮年女性の声が響いた。

「あら、グレイス。それに……ダイアナさん、だつたかしら？ あなたたちも来たのね！」

「ジェシカさん。こんばんは！」
知つた顔を見てほつとする。

左奥のテーブルからグラスを持つたまま立ち上がったのは、既に常連となつた八百屋を切り盛りするジェシカさんだ。すでに学校を卒業した15歳の娘がいるのだがまだまだ若い頃の元気は衰えていない。

この酒場の噂もジェシカさんに聞いたのだった。

「一人とも初めてでしょ？ こつちにいらっしゃい」
「ありがとう」

店の左手、いちばん端に一人で何とかスペースを見つけて腰掛けた。

お手伝いらしい年若い青年が注文をとり、すぐカウンターの向こうに戻つていった。女性たちの後ろ頭の間からあのヒトの黒髪が見え隠れしていた。

田の前にグラスを置いてくれた青年ににこりと笑つてお礼を言つと、茶髪の青年も微笑み返してくれた。八重歯がのぞくのが愛らしく、くりくりとした大きな目も幼い感じがする。たくさんのお客がごつた返す店内を忙しく歩き回つてゐるせいでかすかに頬が上気していた。

「あの子もかわいいわよね。リックくん。お客が増えてきたから店長が雇つたらしいのよ」

「ふうん」

それでますます女性客が増える事になつたわけか。

カウンターに群がつてゐるのは主に自分と同じか少し年上、ちょうどダイアナさんくらいの若い女性たち。テーブル席にはジェシカさんのように40を過ぎた女性も多く見られる。

「そのさ、店長さんてどんなヒトなの？」

「それがね、ほんと謎なのよ」

ジェシカさんはほんの少しだけ声を潜めた。

「出身は王都ユダの城下町らしいのだけど、親類縁者が一人もいない。今住んでる家だつていつの間にか建つていて、いつの間にか引っ越してきただのよ……ああ、その点ではグレイス、貴方と一緒にね」

「わたし？」

「だつて、あなたの家、知らないうちにできただのよ？　この店長さんと一緒に半年くらい前かしら？　突然一つの家が出来ていつときは、街でちょっとした噂になつたのよ？」

「……？」

思わず眉を寄せた。

そんなはずはない。

だつて自分は、親戚が昔住んでいた家に移り住んできたはずなのだ。その家が半年前に突然出来たなんておかしい。

「てつくりグレイスはこの店長さんと知り合いなんだと思つてた

わ。だつておんなじ形の家が一つ、おんなじ時期に現れたのよ？

「誰だつて知り合いだと思うじゃない」

「あ、いや、わたしは……知らないよ。あのヒトとは、初めて会つたんだ」

「どうこいつことだらう？」

あの長身の男性と自分の間に、どんな関係があるのだろう？

それ以上考えるのが怖くて、逃げるように目の前のグラスを手に取る。クラウドさんの瞳のように淡いグリーンの透き通つた液体を少し口に含んだ。

すっとするミントの香りが喉を通り過ぎていく。

「ぐりと喉を鳴らすと、最後に甘みとアルコール独特の匂いが鼻の奥に残つた。

お酒を飲むのはこの街に着てから初めてだつたが、この美しいグリーンのカクテルは一口田で氣に入った。

そのままこぐりこぐりと喉を鳴らすと、グラスの中はすぐ空になつた。

「美味しい？」

気がつくと背後に先ほどのバイト青年が立つていて。子犬のような目が嬉しそうに微笑ついている。除いた八重歯に、何故かどきりとした。

「それはエメラルドクラーって言つんだ。ミントのカクテルだよ」「えと、リッジ、さん？」

「リッジでいいよ。リディアルド＝ピース。ええと、君は店長の隣の家の人だよね」

「うん。グレイシャー＝グリフィス。みんなはグレイスって呼ぶよ」

「あれ、おかしいな。

話しているうちに目の前の景色がぼやけてきた。頭がぐらぐらして周囲の喧騒が遠ざかっていく。

ダイアナさんが叫んだのを最後に、意識が深いところへと沈み込

んでいた。

額に触れる優しい手の感触が心地よかつた。

ゆつくりと目を開けると、最初に見えたのは澄んだ紫水晶^{アメジスト}。

「アレイ、さん……」

喉の奥から声が漏れる。

意味のないその響きは、その場の空気に紛れてかすんで消えていつた。

もう一度目を閉じる。

とても、満たされた感情を心の中に抱いたまま。

「グレイス、グレイス。もうお店はお終いよ。朝になつてしまつわ、
帰りましょう」

とても優しい女性の声が耳をくすぐつた。

その声に導かれるように目を開けた。

最初に見えたのは澄んだ紫水晶^{アメジスト}。

「ダイアナさん……？」

「ごめんなさいね、あなたがこんなにお酒に弱いと知つていたら気をつけたのだけれど」

「ああ、わたし、どうして……」

起き上ると、自分が簡素なベッドに横たえられていた事が分かつた。

ベージュ色のシンプルなワンピースもそのまま着ていたし、左手の白い手袋もはずされていなかった。羽織っていた黒の半袖カーディガンだけがベッド脇に掛けてあつた。

小さな部屋だ。薄暗いランプの明かりだけだと煤けた壁が迫つてくるようにも感じられる。窓のカーテンは閉じられていて、さらに鬱々とした雰囲気を増徴していた。ちいさな丸いテーブル一つだけ

が置かれている。

一泊宿の一室のようだった。

「少し眠っていたのよ。」ここはウォルジエンガさんの酒場の上にある宿よ。別の人気が経営しているらしいのだけれど、ひとつそりお部屋をひとつ貸していただいたの」

ぼんやりと酒場に行つたことを思い出してきた。

ああ、そうだ。あの紫の瞳のヒトに会にきたんだった。

「ウォルジエンガさんは？」

「階下でお店を片付けてるわ。クラウドも手伝っているみたい」

そう言いながらダイアナさんは掛けてあつたカーディガンを羽織らせてくれる。ベッドの脇にはちゃんとサンダルが揃えてあつた。ベッドから降りて立ち上がると、ぐらりと体が傾いた。

「ああ、もう少し無理みたいね。待つていて、クラウドを呼んでくるわ。一緒に帰りましょう」

ダイアナさんが扉から出て行く。

それを見送つてからもう一度頭を枕に預けた。

なんだか頭が痛い。たつたあれだけで酒に酔つてしまつたんだろうか? だとしたらどうしようもないくらい弱いことになる。今度から気をつけなくては。

しばらくしてクラウドさんを連れたダイアナさんが戻ってきた。

「大丈夫かい、グレイス」

「うん、だいじょうぶ。ありがとう、クラウドさん」

ふつと上体を起こすと頭ががんがんと痛み、思わず顔をしかめた。

「どうやら自分で歩いて帰るのは無理みたいだね」

「だいじょうぶ、歩けるよ」

「グレイス、無理はいけないわ」

ダイアナさんがそつと諭した。

そこへ、ノックの音が響く。

クラウドさんがどうで、と言つと扉が開いて長身の男性が姿を現

した。

「起きたのか？ 歩けそつならすぐに帰れ。宿の主に知られる前に

した。

ところが、酒場の店主がその言葉を言い終わる前に、部屋の外から凛とした女性の声が響いた。

「誰に知られる前に、ですって？」

その瞬間、男性の表情がこわばった 気がした。とはいってもともと無表情に近いのにどうして自分がそう思つたのかはわからぬ。ただ、そんな気がしただけだ。

「人の宿の部屋を勝手に使っておいて何で言い草かしらね、ウォルジエンガ。使う時はまず持ち主に尋ねるものでしょう？」「すまない」

酒場の店主は、背後から現れた声の主に素直に謝った。

凛とした声に似合つすらりと背の高い妙齡の女性だつた。釣り目がちなセピアの瞳が色っぽく、ふっくらとした頬は微かに色づいている。薄暗い中で目立つ明るい金髪は肩にかかるてウェーブしながら胸のあたりまで流れていった。

胸元の大きく開いた細身の漆黒のドレスになぜか視線を囚われて一瞬息をとめた。

「いつたい誰なの？」

「……隣の住人たちだ」

酒場の店長さんが言つたのは端的に自分たちの関係を網羅していたのだが、その女性は納得しなかつたようだ。

細い眉をきりりと吊り上げてウォルジエンガ、という長身の男性を睨みつけた。

「それがどうしてこの部屋で勝手に寝てるの？」

「気分が悪くなつたから休ませていただけだ。もう店も閉めるし、すぐ帰らせる。勝手に使つたことは謝るが、これまで何度も何度もここに寝かせたことはあるはずだ。なぜそんなに声を荒げることがある

男性が一気にまくし立てるべく、女性のまつはなぜか眉をよせて不機嫌な顔になつた。

どうにも居づらじ雰囲気がその場を満たす。

その緊張を解いたのはクラウドさんの柔らかいテノールだった。
「すみません、お邪魔しました。宿代は規定通りお支払いします…
…さあ、グレイス、帰ろつか」

そう言つてクラウドさんは背を向けて跪いた。

「乗つて。家まで送るよ」

一瞬ためらつたが、おそるおそるその背に体重を預けて首に腕をまわした。見た目よりずっと大きな背中に安心して体を預けた。なぜかとても懐かしい感じがした。

まるで小さい子にするように背に負つてくれたクラウドさんはそのまま立ち上がり部屋を出る。

あの長身の男性の隣を通り過ぎる時、かすかに彼もじめらを見ていた気がした。

ほんの少し白み始めた暁の空の下、大きな背に守られてゆづくりと家路を辿つていった。

少し見下ろす位置にダイアナさんのふわふわの髪がある。頬をくすぐるよにクラウドさんの金髪がかかっている。この一人は、自分を守つてくれている。

安心感に満たされて目を閉じ、肩に頭を預けた。

温かな感触にまどろみながらかすかな胸の痛みを感じていた。何だろう、とても大事なことだつた気がする。

「眠つたのかい？ グレイス」

かすかにテノールの響きが耳をくすぐる。
もう答えるのが面倒なくらい眠りに近付いていた。

「ふふ、疲れたのね」

ダイアナさんの声も聞こえる。

「アレイも元気にやつていいやつだったね。愛想がないのによく酒

場の店主を引き受けたものだ

「先ほどの宿の主人、ステラさんがアレイを勧誘したらしいわ」

「進んでやるはずはないか、とクラウドさんが笑う。

アレイ、つて誰だろう？

薄れゆく意識の中でかすかに思う。そして、その名に覚えがある気がして思い出そうとしたのだが、どうも頭が働かない。まだ酒が抜けていないうだ。

「あの子も何もかも忘れているようね。ずっと王都の城下町で育つたと信じ込んでいるみたいよ？ ふふ、ウォルジエンガ＝ロータスですって。確かにクロウリーと出会わなければその名を名乗つていたでしょうね」

「彼はやつと安寧を手に入れたのだよ。望んで止まなかつた平和だ。そして隣にラックがいて、他に何を望むというんだ」

クロウリー。ラック。

心かき乱す単語が並んでいく。

「私たちはただ見守ればいい。一人が安心して暮らせるように。傷を忘れ、責務を捨て、自分たちだけのために生きられるように」深い意識の底で確信した。

クラウドさんもダイアナさんも、自分の記憶があいまいな戦争前後の自分のことを知つているのだ。それも、かなり近しい人物だつたんだろう。

きっと紫の瞳のあの長身の男性も。

次に会つた時はもう少し落ち着いて話してみたい。出会いが最悪だつたけれど、これからまだまだその関係は変えられるはずだ。

何よりあのヒトの紫の瞳が瞼の裏に焼き付いて離れない。

「あの時は何もしてあげられなかつたからね。今度こそ、幸せに暮らしてほしいと思うよ」

クラウドさんのテノールに導かれるよつとして安らかな眠りに落ちて行つた。

しかしながらそれからの生活が何か変わったかと聞かれれば、そうでもない。でも、あの酒場には何となくいつも近寄れなかつた。また迷惑をかけてしまいそつだつたからだ。

何より、あの紫の瞳を見ていると自分の中がひどく乱されて怖かつた。

酒場のバイトのリッドはたまに街で見かけることがあり、そのうちに仲良くなつた。

人懐こく明るいリッドと一緒にいると楽しい。

その日も毎に中央広場で待ち合わせして、バイトの時間まで一緒にいるつもりだつた。

遠くから茶髪の青年を見つけて手を振ると、彼も手を振り返してきた。フード付きの半そで短衣と7分丈のパンツ姿だつた。ところが何と半袖の裾からのびる上腕から手の甲にかけて黒々とした刺青が入つている。これまでずっと袖のある服を着ているところしか見たことがなかつたから驚いた。

愛らしい子犬のような笑顔と不似合いな仰々しい炎を模した紋様だ。そしてよく見れば茶髪に見え隠れしている耳にはいくつもピアスの跡があつた。

あれ、なんだかちょっとイメージと違う。

が見え隠れしている。

「やつぱりちょっと……怖いかな？」

左腕の刺青を隠すように撫でながらリッドが問う。

「つうん、ちょっとびっくりしただけだよ。かっこいいね、それ

「……ありがと」

リッドは肩をくめるよづにして笑つた。

嬉しそうな悲しそうなそんな複雑な表情だった。

いつしか街では噂になっていたようで、一人でアイスを食べながら街を歩いていると、ジョンシカさんが「ニヤニヤしながら呼び止めた。

「知らないうちにずいぶん仲良くなつてるね、二人とも」

「グレイスが馴れ馴れしいからだよ……年いくつ?」

「ん、たぶん20歳」

「えつ、オレより上じゃん? ! セイゼン、17くらいかと思つてたのに」

「20と17はそれほど変わらないんじゃ……と思つながらも一応聞く。

「リッドはいくつ?」

「オレは今度の誕生日で19になるよ」

「へへ、んじや弟だ」

「ほんほん、と少し高い位置にある茶髪を撫でると、リッドは唇を尖らせた。

「本当に20歳? 嘘ついてない? どう見てもオレより子供に見えるよ?」

「リッドに言われたくないな」

「私にしたら一人とも似たようなもんだよ」

ジョンシカさんは呆れたように言い放つた。

「それよりジョンシカさん、フィオナさん知りませんか? 最近店で見ないんですけど」

「ああ、フィオナなら数日前から体調崩して休んでるよ。毎晩のようになにあの店で飲んでるんだから、そりや体も悪くするわ」

「大丈夫なのかな?」

「ああ、少し休めばいいと思つけれど……」

彼女はそこで少し躊躇つた。

ダイアナさんが不安そうな表情で首をかしげる。

「どうかされたんですか?」

「あの店、ウォルジエンガさんの店に通い過ぎて体調を崩す女の子たちが増えたのよ。常連さんは特に気をつけてあげたほうがいいわよ、リッド君」

「分かりました。ありがとうございます、リッドははまほりこます」

リッドははまほりこと返事をした。

「ほら、トマトやるから途中で食べてきな」
ジエシカさんは最後にトマトを一つ放つた。

「ありがとう！」

二人で手を振つて通りを駆けて行つた。

リッドといふことでも楽だった。何も考えなくて済むから。過去のことも、あの紫の瞳をもつヒトのことも。
街の中央を流れる用水路の縁に腰かけて、ジエシカさんにもひつたトマトをかじつていた。

その間も左腕の刺青が気になつてしようがない。

「ね、その刺青見てもいい？」

「いいけど……見て楽しいもんじやないよ？」

リッドは左腕を差し出した。

漆黒の細かい紋様が彫り込まれていた。炎の揺らめき一筋一筋まで鮮明なそれは、今にも燃え上がりそうなほどに精巧な細工だった。
「昔よつと荒れてた時期があつて。反抗期つてやつだね。家族の反対を押し切つて戦争にも行つたよ……負けちゃつたけどね。あのグライル合戦ヘルムを経ても命があつただけでもよかつた」

リッドは笑つた。いつものように、しかしその中には悲しみが混じつていた。

「でも一緒に行つた弟は……」

言葉はそこで途切れた。もちろん先を言わなくとも分かる。

思いがけぬ彼の過去に言葉を失つてしまつた。

「だからオレだけでも孝行しようと思つてさ、のこのこ一人で帰つてきたわけ」

「……」「めんね」

聞いてしまって。思い出せてしまつて。

口を噤んで俯くと、リッドの指が頬にふに、と当たつた。

「大丈夫だよ、気はないで。グレイスはそんな顔似合わないよ。はつと隣を見ると、いつものように明るいリッドの笑顔。

笑つて、グレイス。オレは君に笑つていて欲しいんだ」

「リッド……」

そして、ふわりと温かな感触に包まれた。

「ありがとう、グレイス。心配してくれて」

気づけばリッドの手が背に回つていて、自分の額はリッドの肩に当たつていた。

「ちょっと……リッド…」

「暴れないでよ。嫌がられるといくらオレでも傷つくんだけ?」耳元で静かに呟いたリッドの声はどこかいつもより大人びていて、どきりとした。細いと思っていた腕も、思つたよりずっと力強かつた。

何だか急に恥ずかしくなつて、腕の中ですつと硬直していった。

その晩はリッドのことが気になつてあんまり眠れなかつた。

眠い目をこすりながら裏口から出て、井戸のところで顔を洗う。降り注ぐ太陽の光が眩しい。隣ではクラウドさんの剣術道場の骨組みが完全に出来上がつていた。完成は目の前だらう。響くトンカチの音が今では心地よく感じるようになつていて。

作業準備だらうか、太陽のもとで目立つ金髪を揺らして動き回つているクラウドさんの姿を目を細めて見てはいるが、ダイアナさんがやつてきた。

「おはよう、グレイス。よく眠れたかしら?」

「うん、もちろん!」

ダイアナさんはよかつたわ、と微笑んでからある提案を持ち出し

た。

「あのね、お隣さん、ウォルジンガさんね、すゞく疲れているみたいなの。だから今日は……」

昼食が済んでから一人で夕飯のために買い物に出た。

「リッド君と中央広場で待ち合わせよ」

「あ、リッドも来るんだ」

昨日のことを思い出してほんの少し微妙な気持ちになつた。顔が赤くなつてやしないだろうか。

「どうしたの？ 嬉しくない？ リッド君とは仲良しだと思つたのに

「ううん、すっごく楽しみだ！ パーティなんて初めてだよー」
ダイアナさんの提案は、みんなで『これからよろしく』を兼ねてパーティをしよう、というものだつた。すでにバイトのリッドも巻き込んであって、店はお休みにしてもらつたらしい。

場所は……なんとウォルジンガさんの家だ。眠つているうつむか勝手に入り込んで準備しようという何とも無謀かつ大胆な計画だつた。

久しぶりにあのヒトに会える。

嬉しいような怖いような、そんな複雑な気分だつた。

「あ、ダイアナさん！ グレイス！」

中央広場にはリッドが待つていた。

いつもと変わらない様子にほつとする。

「じゃあお買い物に行きましょ。何が食べたいかしら？」
ダイアナさんの問いに間髪入れず答える。

「ケーキ！ ダイアナさんのチョコケーキがいいな

「分かつたわ。帰つたらすぐに焼きましょう。リッド君は？」

「オレ甘いものはちょっと……あ、グラタン食べたいなあ。トマトソースのやつ！」

「じゃあ途中で挽肉も買いましょう。他にもあるかしら？」

「桃！わたし桃大好き！」

「オレ桃より梨が食べたい」

「梨は季節外れじゃん」

「桃だつて大概だろ！」

リッドと言い合っていると、ダイアナさんがくすくすと笑う。

「そうしてると本物の兄弟みたいよ？」

「リッドの方が弟だからな！」

「たつた1年早く生まれたからつて……」

リッドが唇を尖らせる。

その様子を見てダイアナさんはくすくすと笑った。

「さあ、早くしないとウォルジエングガが起きてしまうわよ？」

「はあい」

二人同時に返事してしまって、田をぱちくりさせて顔を見合せた。

料理の準備をしているダイアナさんとリッドより一足早く、荷物をいっぱいに抱えてこつそりウォルジョンガさんのお宅に侵入した。足音も、息遣いすらひそめてリビングに忍び込む。

「お邪魔します」

静かに囁いて、扉をそつと閉めた。

とても殺風景な部屋だった。自分の家と完璧に同じ構造だらう。奥のほうに続く細い廊下の両側に書斎と寝室、そして一番奥の扉は裏口になつているはずだ。ただ、自分の家と全くそつくり同じキッチンはここのこところほとんど使われた形跡がない。

それでも一人掛けの小さなテーブルも、扉にかかっている鏡まで同じだつた。あまりに違ひが見当たらなくてうろたえてしまつほどに。

同じ時期に、突然同じような小屋が出来ていたのだというジェシカの言葉が頭の中にリフレインする。

心臓の音が耳元で響いていた。

足もとが揺らぐ。疑惑が全身に広がつてキモチワルイ。

親戚が住んでいた家に越してきたって？そんなことあるもんか！こんなのおかし過ぎる。どうしてまったく同じ家が二つも現れる？構造から配置から、家具まですべて同じ。

あり得ないよ。

でも、その否定は自分自身の過去の否定と同義だった。

「わたしは……誰？」

記憶と日常が崩れていく音がする。

足が震えた。

荷物が手から滑り落ちて、大きな音をたてた。

「助けて」

思わず喉が震える。

突然地面が喪失する感覚に襲われた。地に手をつき、荒い呼吸を整える。

この記憶はいつたい何？優しい母と一緒に穏やかな時を過ごしていたのはウソ？親戚つて誰？ここに小屋を作ったのは？クラウドさんとダイアナさんは、いつたい自分の何を知っているんだ……？

全身に無数に刻まれた傷の意味は？

恐る恐る左手の白い手袋をはずす。

火傷のように血管が赤黒く浮かび上がった手の甲。胸元に貫通した傷跡。首筋にも、背中にも左肘のあたりの付け根も。

全身が震えだす。

かすかに呼びさまされる記憶。

「血の、匂いがする……」

自分の両手が真っ赤に染まって見えた。口元がぬるぬるする。鉄の匂いが鼻をつく。

悲鳴、怒号、断末魔。助けを請う声も、両手がしびれるような武器の感触も閃く攻撃の軌道も……その先にあるのは、雨を弾く銀髪。目の前が真っ赤に染まる。

「うわあああああ！」

喉の奥から絶叫がほとばしった。

嫌だ。嫌だ。怖い……逝かないで。わたしを、おれを置いて逝かないで！

全身の傷がいっせいに悲鳴を上げた。
ただ、額が焼けるように熱かった。

やさしい腕に抱かれて幸せだった。

愛していると囁いてくれたから。

ずっと、傍にいてくれるって。嫌がっても離さないって

ゆつくりと意識が浮上する。

心配そうな顔がいくつも覗き込んでいた。

「よかつた、グレイス……」

ダイアナさんの大きな紫の瞳が潤んでいる。

「あれ……わたし……？」

ゆっくり起き上がる。

ダイアナさんだけじゃなくクラウドさんもリッドも、ウォルジエさんもいた。

ひどく頭が痛い。全身も鈍く痛む。それより何より 記憶の断片が頭の片隅を刺激していた。

「ごめん、ありがとう。心配かけたよね」

無理に笑顔を作つて笑つてみたけど、うまくいかなかつた。すぐに作り笑顔をしまい込んで、真剣なまなざしを向ける。

「あのね、ウォルジエンガさんと一人で話したいんだ……少しだけいいかな？」

「えっ、でも、グレイス……」

リッドが止めようとしたが、それをウォルジエンガさんが遮つた。

「いいだろう。ちょうど俺もそう思つていたところだ」

静かな部屋に一人だけが残された。

ここは自分の寝室と同じ。ベッドの配置もシーツも、かけてあるハンガーの数まで。

でも、包まれたシーツからは自分のものとは違う男のヒト独特の匂いがした。きっとここは隣の家、ウォルジエンガさんの寝室なんだろう。

外は真つ暗だ。ずいぶん長く意識を失つていたらしい。

ベッドの縁に座る。

ウォルジエンガさんの いや、ウォルジエンガ、と名乗つた男

性の紫の瞳を視界に入れるだけで頭が割れそうに痛かつた。それでもその瞳から目を逸らさなかつた。なぜなら紫水晶もまつすぐにこちらを射抜いていたから。

自分は知つてゐる。この、真つ直ぐな瞳を。

「ウォルジンガさん……でいいかな」

「ああ、そうだ」

「でもそれ本名じやないよね、きつと」

そう言つと、一瞬紫の瞳に動搖が見られた。が、それは本当に一瞬で。

「ああ、そりだらうな」

すぐに答えが返つてきた。

やはりそうか。このヒトはきっと自分の過去を知つてゐるんだ。去来する苦しさが何なのか、狂おしいほど切ない感情がどこからくるのか。

聞きたい。自分の過去が知りたい。それを知ればきっとこの胸の中の喪失感も渦巻くような不安もすべて消え去るだらうから。

ところが、目の前の男性の口から洩れたのは、驚くべき真実だった。

「だが本当の名は俺にもわからぬ」

「……え？」

思わず素つ頓狂な声が出た。

「この街に来る前25年間の記憶はぼんやりとしか残つていない。まあ、その記憶もすべて幻想かもしけないが」想定外の返答に、目を丸くしてしまつた。

覚えていない?わたしのことどころか、自身の過去も?何だ、このヒトも

思わず笑みが漏れる。

「何がおかしい?俺を馬鹿にしているのか?お前は俺を知つていたはずだ。この街に来る前の俺を……そうでなくては、お前にこ

れほどまで心かき乱される理由がない！」

強い口調で、鋭い視線で睨みつける。

知っている。この真っ直ぐな目。すべて無表情な仮面の下に隠した実直で、素直な心。

「教える！俺はいつたい……誰だ？」

「……ははっ」

「まだ笑うか！」

怒声が飛んできたが全く怖くなかった。初対面ではその冷たさうな仮面が怖かつたのに。

思わず微笑みが唇の端に漏れる。

「違うよ

おかしいわけじゃない。

嬉しいんだ。

「わたしも……同じなんだから」

気まぐれな猫を手懐ける気分だつた。手を差し伸べ、敵意がないことを示して全身で好意を示す。そつすればきっと、心は通じるはずだ。

「わたしもここに来るまでの記憶がすこく曖昧なんだ。すこく幸せにカトランジエって街で母さんと暮らしてた気がするんだけど……」そこでいつたん口をつぐんだ。口に出すのは少し憚られたからだ。代わりに、身につけていたワンピースの紐に手をかけた。そのままするりと肩から外す。

「なつ、何をして……？！」

彼は慌ててぐるりと後ろを向いた。

その間にワンピースを完全に脱ぎ去つてベッドから降りる。

「見て」

「馬鹿か！ お前は！ 見られるか！」

「いいからこつち見て！ 別に変な意味じゃないからー。」

叫ぶと、彼はぴくりと肩を震わせた。

ゆつくりと振り返る。

「とてもじゃないけど……平和の中にいたとは思えないよね」

下着姿のまま彼に背を向けた。恥ずかしいからではない。すべてを彼に、見せるため。

振り返った彼の眼が驚きに見開かれるのが分かつた。

「お前……」

肩甲骨の下を横断し、首から腰にまで及ぶ大きな逆十字傷。それだけではない、左肩の下、ちょうど心臓辺りに胸まで続く何かが貫いた跡。頸筋にも深く十字が刻まれ、左ひじの根元も千切れたような傷、手の甲は焼けただれたように赤黒い血管が浮いている。他にも足も手も傷跡だらけだった。

肩越しに彼を振り返る。

笑つてみたけれど、うまくいかなかつたかも知れない。

呆然とした彼は声を失つていた。

「すごいよね。びっくりするよね。でも、覚えてないんだ。いつ受けたのかも、どうして誰につけられたのかも」とくに目立つ左手をぎゅっと握りしめる。

力の強さに拳が震えた。

「わたしには過去がないよ。戦争ですごく酷い目に逢つたのかも……記憶をなくすくらいに」

今度は完全に背を向けた。

嬉しかつた。彼が自分と同じ不安を抱えていたことが。同じように記憶の片隅で自分を呼んでいてくれたことが。自然に肩が震えて、目頭が熱くなる。まるで、このヒトに初めて出会つたあの時のように。

「でも、これだけは覚えてるんだ」

ぐるり、と振り返る。

頬を涙が伝つた感触があつた。

「きつとずつとあなたを 探してた」

「のまま時が止まるかと思つた。心臓が早鐘のように鳴り響いている。

でも、これで自分が言いたいことは全部だつた。受け入れてもらえるかも分からぬ。

が、気がつくと彼は自分のすぐ傍まで来ていた。背の高い彼が近づくと、少し紫の瞳が遠ざかる。首をいっぱいに見上げた紫水晶は痛みを隠せないでいた。

「ウォルジエング……さん？」

「ウォルでいい」

大きな掌が頬に当たつて、涙をぬぐつていった。

「俺は過去を持たない。いつたいどんな人生だつたのか……少なく

とも、安寧とした暮らしをしていなかつたことくらいしか分からない」

そう言いながら、彼は自らの服に手をかけた。鍛え上げられた体が現れてどきりとする。服が床にばさりと音を立てて落ちた。

ところが、その体には無数の傷が刻まれていた。

腹も腕も胸のあたりも縫合跡がある。左肩のあたりには引きつったような大きい痕があるし、他にも裂傷が多い。何より、心臓の真正あたり、左胸に何かに貫かれたような傷跡が残つていた。

その姿に胸がギュッと締め付けられる。

「俺もお前と同じだ。とても平和な場所にいたとは思えない」動けないでいると、大きな手が背に回されて、頬がちょうど傷跡のある胸に触れた。

やさしい鼓動が聞こえる。穏やかで温かい心地よい拍動。

「もし、記憶のない過去、お前と出会つてているのだとしたら もしかすると、同じ戦場で肩を並べていたのかもしれない」

深いバリトンは震える心に染み込んでいった。

理屈ではなく涙があふれてきた。

「俺は俺のことをよく知らないし、お前はお前のことをよく知らない。もちろん、互いのこともだ。でも、これから……これから、知つていくことはできないか？」

このヒトにひかれたのは、既に失つてしまつた記憶が叫んでいたからだろう。きっとたくさんの試練を一人で乗り越えて、愛をはぐくんだんだろう。

だとしたらきっと、それを最初からやり直すことも可能だ。

「もし記憶をなくす前にこの平和を望んでいたとしたら」

「ここから始めればいい。

幸い平和は有り余るほどあるんだ。

「もし失くした過去が辛いものなら思い出さなくてもいい。ただ、今生きてここにいる。それだけでいい」

過去の自分は戦いの中に身を置いていた。

今は、少しきらいこの穏やかな時に身を任せてもいいだろつか。
愛しいヒトの腕の中で、優しいバリトンを聞きながら。

「俺もずっと……お前を、待っていた」

その言葉で胸が締め付けられる。

嬉しさと切なさが同居して、わけのわからない感情に支配された。

「ウォル……」

喉から洩れた名はこれから呼び慣れるまで繰り返せばいい。

「グレイス」

もつと触れて欲しい。抱きしめて欲しい。優しく囁いて欲しい。

たくましい腕で自分は簡単に宙に浮く。

アメジスト
紫水晶を見下ろした。端正な顔、その頬をそつと両手で包みこむ。

きっと自分を同じくらい、いや、自分以上に傷ついてしまったこの

ヒトを少しでも癒したい。

そつと皿を閉じて唇を重ねた。

あの時誓った言葉は、嘘ではなかった。

ウォルと一人で暮らすようになるまでそう時間はからなかつた。彼が夜の仕事をやめたからだ。どうやら雇主と少しだけもめたようだつたが、そんなことウォルはおぐびにも出さなかつた。

あの日以来少しそよそしくなつてしまつたリッドは、完成したクラウドさんの剣術道場に通い始めた。

「リッド君は筋がいい。すぐに上達するよ」

何度か道場に顔を出したが、稽古を見ていると過去の傷が疼く。すぐに入りするのをやめてしまった。

冬になる頃には常にウォルと時間を過ごすようになつていて。まるでこれまでの分を取り戻すかのように常に触れていた。

声を聞いていたかつた。名を呼んで、優しく撫でて欲しかつた。

ウォルの声も手もこの上ないくらいに優しい。

「いつか、自分で店を持とうと思つ。今度は僕、酒は出さずに料理だけで」

「本当?」

「ああ。お前が前で作つてて野菜も使おう。ウェイターにリッドを雇いたいな」

「ふふ、楽しそう」

たくさんの夢を見た。幸せな世界。自分を傷つけようとするものではなく、愛しいヒトの腕に抱かれて。

同じ傷を持つ彼の前では傷を隠す必要もない。

とても幸せな日々だった。

そしてある日、ダイアナさんの家で、リッドも混ぜて5人分の夕飯の支度をしてくる最中にふと気分が悪くなつた。

こみ上げる吐き気にその場から駆け去る。

「グレイス？」

ひととおり食べた物を戻して息を整えた。
何だか。変なものでも食べただろうか。
そう思つてみると、ダイアナさんはひそひそ、と耳元で囁いた。

「もしかして……」

その質問にびっくりする。

「そうだけど……どうしてわかったの？」

肯定すると、ダイアナさんはぎゅっと抱きついてきた。

困惑した。

が、すぐにダイアナさんの声が耳元に響いた。

「おめでとう、グレイス。それはあなたとウォルジエングの」

とても不思議だった。自分の中にひとつ命が宿っているということが。

ダイアナさんがすぐにウォルを呼んできた。

息を乱した彼は、椅子に座っていた自分のもとに跪いた。

「……ウォル」

見下ろした紫水晶は困惑していた。もちろん自分だってびっくりしている。

両手をお腹にあてて、ゆっくり撫でてみた。ウォルの手をとつて

それに重ねる。

「ね、信じられないよ。ここに、わたしとウォルの子供がいるんだ
つて」

「グレイス……」

気を利かせたのか、いつの間にかダイアナさんの姿が消えていた。

「どうしよう、すごく嬉しいんだ」

何故だろう。泣きたいくらいに嬉しい。

愛するヒトと自分の想いが通じた証拠。新しい命の芽生え。

紫の瞳が優しく微笑む。

「ありがとう、グレイス……俺も嬉しい。お前に会えてよかつた」
「ウォル……」

そこで、ウォルはいつたん視線を逸らした。

かすかに頬が赤い気がするのは気のせいなんだろうか。

「……まだ言つていなかつたな」

ぼそり、とそう呟くと、そつと耳元に唇を寄せた。
深いバリトンが耳元で響く。

「愛している、グレイス……アメジスト結婚しよう」

驚いて目を大きくしていると、紫水晶を包有した切れ長の目が覗き込んだ。

優しい瞳。真っ直ぐな思いを込めた、澄んだ瞳。

頬を涙が伝う。

「うん……する」

涙でぐちゃぐちゃになつて笑えなかつた。

それでも、優しく包んでくれた腕はとても温かくて優しくて、自分は心の底から安心することが出来たんだ。

愛するヒトが隣にいて笑つてくれる。

ただそれだけで何でこんなにも幸せなんだろう。

仕立て屋のマリー姉さんが自分のためにウェディングドレスを作つてくれた。

式の一週間前には出来上がりつていたそれは、春らしい花をモチーフにした純白のドレスだった。自分で着るのがもつたいくらいのそのドレスを手にして、もう一度実感がわいてきた。

自分は、ウォルと結婚するんだ。

もう一生離れないんだ。

この子供を育てるんだ。

「ああ、本当に幸せそうね！ 見ている」いつまでも幸せよー。」

「ありがとう、マリー姉さん。す、ぐ……きれい！」

「あなたの美しさに負けないよう腕によりをかけたんだから」
パチリとウインクしたマリー姉さんも昨秋に結婚したばかりだつ

た。

「お腹はまだ目立たないみたいね。よかつた。採寸し直しなんて私も、いやよ」

「うん、もうちょっとしたら目立つてくるって。生まれるのは夏の終わりが秋ぐらいだつて言われたよ」

「ふふ、楽しみね。あなたとロータスさんの子ならきっと奇麗な子でしょ、うね」

「元気に育つといいな」

楽しみでしかたなかつた。

だつて自分の先には幸せなことしか待つていなかつたから。もう少しでウォルは新しい店を持つことも決まつていた。
未来がこんなに待ち遠しいなんてしらなかつた。

快晴の春、街の中央広場でみんなが盛大に式を開いてくれた。

「おめでとう、グレイス、ウォルジエンガ」

目の前のダイアナさんは大粒の涙をこぼしている。隣にいたクラウドさんも心なしか瞳を潤ませていた。

集まつた観衆から祝福が飛ぶ。

ひとつおりみんなに手を振つてから紫の瞳を見上げた。

「これからはずつと一緒だね、ウォル」

「これからも、の間違いだ」

ウォルはそう訂正してからわたしの体を軽々と抱き上げた。
紫の瞳が近づいてどきりとする。

「愛している……グレイス」

耳元に深いバリトンが響く。

何度も何度も繰り返す言葉。それでも何度も何度も囁いてほしい

と思う。

「わたしもだよ、ウォル」
もう過去の傷は痛まなかつた。

温かい春の風に包まれて、優しい人々に囲まれて、愛しいヒトに
触れられて。

もうこれ以上望むものなど何もなかつた。

きつとこれは過去の自分がずっと求めていた世界。祈つてやまな
い、しかし手に入らなかつた穏やかな生活。

この時自分は21歳、ウォルは27歳。普通のヒトが当たり前に
享受する幸せを全身で感じながら。
過去の傷を少しづつ封印していった。

扉を開けると小春日和の暖かい風が迎えてくれた。夏が終わり、冬に向けての穏やかな季節だ。

春と似た、しかしどこか寂しそうな景色を見ると昔のことを思い出しそうになる。

「おはよう、ダイアナさん」

声をかけると、前庭の花に水やりをしていた彼女はふと顔を上げた。

「おはよう、グレイス。あんまり動いちゃダメよ？」

「大丈夫だよ。だってこんなにいいお天気なのに外に出なくちゃ勿体ないでしよう？」

仕方ないわね、とダイアナさんは笑った。

もうずいぶん大きくなつたお腹は、出産を待つばかりだ。

「グレイス！」

遠くから声がする。

振り返ると、黒髪の男性が駆けてくるところだつた。

「体に障るからあまり外に出るなと言つてあつただろ？！」

「でもずつとうちの中にいたら気がおかしくなつちゃうよ」

「ふふ、生まれる前から過保護なお父さんね。今からこれじゃあ、生まれたらどうなるか……」

ダイアナさんがくすくすと笑う。

ウォルは非常によく出来た夫だつた。店も軌道に乗つてきて忙しいといつうのに身重の自分の代わりに家事も引き受けた。もちろんその分副店長を務めるリッドに負担がかかっているのはよくわかつていた。

そのため、最近ではダイアナさんが手の空いたときによく遊びに来てくれた。

「やあ、ウォル。仕事はどうしたんだい？」

そこへ柔らかなテノールが重なる。稽古着のクラウドさんがにこにことしながらこちらにやつてきた。

クラウドさんが始めた剣術道場は、いまや多くの街の子供が集まる場所になっていた。毎日毎日、朝から晩まで道場生が入れ替わり立ち替わり稽古にくる。

その中にはリッドの姿もあつた。

早いうちから入門した彼は今や筆頭で、クラウドさん以外はだれにも負けない素晴らしい剣士に育つていた。クラウドさんの流れるような美しい太刀を継承し、時に教鞭をとることだつてある。

人懐こい笑顔は相変わらずで、店での評判も上々だつた。

ウォルの無愛想も最近ではだいぶ緩和されていた。慣れてくると様々な表情を見せてくれる。

今もクラウドさんには逆らえないらしく、紫の瞳を歪めてバツが悪そうにぽつりと咳く。

「……リッドに任せてきた」

「リッドにぱつかり負担かけちゃだめだつて言つてるじやん！」

そう言つて頬を膨らますと、珍しくうなだれた。どうやら自分でも自覚はあつたらしい。大きな体で、この容姿で、ウォルはたまに本当に可愛らしい反応をする。それが本当に愛おしくて仕方がない。もつと知りたい。このヒートのことを、ずっと隣で見ていたい。いろんな表情を、声を、言葉を、仕草を。

この穏やかな時の流れの中で。
やわしい人々に囲まれて

でも、きっと世界はそんなにも優しくない。

遠くから駆けてくるリッドの姿が見えた。

「クラウドさん！」

切羽詰まつたその声は、日常が瓦解する契機として十分な役目を果たしていた。

膝に手をついて息を整えているリッドの様子は尋常ではない。

「どうした？ リッド。店で何があつたのか？」

「店、じゃ、なくて……いま街全部が……」

「急がなくてもいい。何があつたのかゆづくりと話してくれないか？」

クラウドさんが優しく諭す。

しばらく息を整えた後、リッドは真剣な声で言つた。

「セフィロト軍が……来てるんだ」

その瞬間、クラウドさんの表情が凍りついた。

このヒートのこんな顔を見たのは最初で最後だつた。

リッドの話によると、突如現れたセフィロト軍がすべての家に入り込み、悪魔崇拜の証拠を見つければ罰しているらしい。

天使崇拜の命令が下されてから約半年、そろそろ取り締まるにはいい時期だらう。

「今、ローストさんとリストさんが捕まつた。オレは途中でこいつに来たから、まだ捕まる人は増えるはずだ」

この街の人々は特別悪魔信仰に盲目的なわけではない。

それでも、何百年も祀つてきたものを突然辞めろ、と言われても無理な話。悪魔に関する本や魔界の長リュシフェルの像などは捨てた者の方が少ないはずだ。先祖代々守つてきたものを、どうしておいそれと捨てられようか。

いつの間にかクラウドさんは穏やかな顔に戻つていた。

「ウォルジエング、グレイス、一人はすぐ家に戻りなさい。ダイアナは一人についててくれるかな。リッドは私と一緒に来てくれ」「待て、俺も行く」

ウォルがそう言つたが、クラウドさんはこりと笑つて言つた。

「だめだよ、大切な人の傍を離れては」
その笑顔にウォルはぐつと詰まつた。

ダイアナさんと3人で駆けていく師弟の姿を見送った。

ひどく不安だった。

夫婦の家に入り、温かい紅茶をいれた。

「この家にはないのか？ 悪魔信仰の証拠となるようなものは？」

「ふふ、ちゃんと隠してあるわよ」

ダイアナさんの言葉にウォルはあからさまに眉を寄せたが、言い返すことはしなかった。

街はずれにあるこの場所では喧噪も聞こえないために、辺りを静寂が包んでいる。耳が痛くなるような静けさに、気分が悪くなってきた。

「クラウドもダイアナも……未だ悪魔信仰を捨てないのか？」

「そうね。信仰、というよりは身近で当たり前すぎて今さら遠ざかる」となんてできないわ。きっと多くの人がそう思っているはずよ

「……それによって国から弾圧を受けるとしてもか？」

「ええ。もちろんよ。だって私たちには魔界の王リュシフェルがついているわ。それに戦の悪魔マルコシアスも」

「そんなこと口に出すな。誰が聞いているか分からんぞ」

ため息をついたウォルに、ダイアナさんはくすくすと笑う。

「大丈夫よ、だって噂によるとゼテキヤ王の唯一の息子であるユウレク殿下は未だセフィロトの手に落ちてはいないのでしょう？ 皇太子殿下は聰明で情に厚い立派なお方よ。時間はかかっても、きっとまたグリモワール王国は再建するわ」

「……まるで皇太子を知っているような口ぶりだな」

「ふふふ」

ダイアナさんは微笑んだだけだった。

でも、ダイアナさんとクラウドさんの夫婦はグリモワール王国で高位に在った貴族だともっぱらの噂だ。皇太子と会っていてもおかしくはないかもしれない。

「それよりグレイス、顔色が悪いわよ。大丈夫かしら？」

「う、うん。大丈夫……」

「そっちは言ったものの、気持ち悪さを通り越してお腹が痛くなつて
きた。

「ちょっとお水もらつてもいいかな」

そう言つて椅子から立ち上がつた瞬間、すさまじい腹痛に襲われ
てその場に崩れた。

「痛……っ」

「グレイス！」

ウォルが慌てて支えてくれた。

が、痛みが引く気配はない。それどころかだんだん強くなつてい
く。

ダイアナさんの判断は早かつた。

「ウォルジエング！ 今すぐ街まで走つてディーンさんを連れてく
るの。早く！」

「あ、ああ」

ウォルは弾かれたように駆けて行つた。

「グレイス、ベッドまで歩ける？」

「う、うん……」

怒涛のように襲つてくる痛みに耐えて、寝室へ向かう。
それだけで全身の体力を吸い取られてしまつたようだ。

「大丈夫、ウォルもすぐ戻るわ。頑張つて、グレイス」

「分かつ……た」

どうしようもなく襲つてくる痛みと闘いながら、優しい紫水晶を
脳裏に思い描いていた。

アメジスト

まさか自分が命を繋ぐことになるなんて思つてもみなかつた。いくつもの命を奪つてきたこの手が、大切なものをいくつも失つてきたこの小さな手が、新しい命を抱くことになるなんて想像もできなかつた。

それも、同じ傷を持つ男性と結ばれて

産声を聞いた時、これまでの痛み全てが吹き飛ぶようだつた。女医のディーンが取り上げてくれた赤ん坊は、けたたましい声をあげて泣いていた。

「ふふ、びっくりね」

産声は、二つ。

荒い息の中で、幸せをいっぱいに感じていた。

「男の子と女の子、一人ずつよ」

すごく長い距離を全力疾走したつてこんな疲れないだろつ。全身を凄まじい疲労が包んでいた。

それでも。

まだ目も開いていない二人の赤ん坊をタオルにくるみ、傍に置いてくれた。

それだけで胸が裂けそんなくらいに幸せだつた。理由もなく涙が流れた。

「やつと……会えたね」

触れた手は本当に小さかつた。

それだけでもう十分だつた。

温かい、小さな命に触れながら眠りについた。

目が覚めたのは、周囲が騒がしかつたからだ。

「ウォル……？」

最初に呼ぶのは愛しいヒトの名。

しかし、姿が見当たらなかつた。

全身の倦怠感と下腹部の鈍痛。見上げた天井は暖炉の煙で煤けていた。

「グレイス、大丈夫よ。ウォルジエンガもすぐに戻るわ

ダイアナさんの声がした。

顔の真横には、ちゃんと赤ん坊が一人すやすや眠つていた。

「何か……あつたの？」

なんだか騒がしい。

その不穏な空気を察したのか、赤ん坊もぐずり始めた。

何とか上体を起こして辺りを見渡す どうやら、騒がしいのは扉の外、ひいては家の外のようだ。何か言い争つてゐる声がした。時々……金属がぶつかり合つう音がする。

「ここでじつとしているの。動いちゃだめ。絶対よ。いいわね？」

ダイアナさんは自分にそう言い聞かせて部屋を出て行つた。

泣きそうになつてゐる一人を抱き上げて、軽くゆする。

「よしよし……もうすぐ、お父さんに会えるからね」

とても大きくて優しいお父さんだから。すこく綺麗なヒトなんだよ。まるで伝承に伝え聞く悪魔さんみたいに。

まだ目も開いていない赤ん坊は少しずつ落ち着いたのか静かになつた。

かすかに寝息が聞こえて安心した。

もう一度眠りについた一人をそつとベッドに戻す。

倦怠感と痛みに耐えながら、ゆっくりと部屋を後にした。

足を一步踏み出す度に痛みが走る。

しかし、確かめたかった。ウォルもいない。ダイアナさんも出て行つてしまつた。

外で何か起こっているのは明らかだった。それも、この不快な金

属音は 剣戟。

「ウォル……どこ行つたの？」

何とか扉まで辿り着いたが、すでに体力は限界に近かつた。

それでも渾身の力をこめて扉を開く。

が、目の前に飛び込んできたのは最悪の光景だった。

扉を開けると、すさまじい金属音が響いた。

「ばかっ！ グレイス……！ 来るなあっ！」

リッドの声が響く。

見れば、白い甲冑を纏つた騎士とリッドが打ち合っている。

なぜ？ これはどういうこと？

「来ちゃだめって言つたでしょ、グレイス！」

「でもつ……」

またずきりと痛んだ。思わず扉にもたれかかるように座り込む。リッドは真剣な表情で剣を構え、ダイアナさんを背にして立つた。

何だこれ？

呆然となると、白騎士の後ろにいた少年がこちらを向いた。真っ白な神官服を纏つたその少年はけらけらと笑つた。

「あれがラック＝グリフィス？ ふうん、思つてたより弱そう

誰だ、あの少年は。

黙つていれば美少年だと大絶賛してもらえるだろうに、生意気そうな表情を張りつかせて嘲笑していた。美しい琥珀色の瞳と対照的に新縁を思わせる淡いグリーンが混じつた銀髪だ。肌も陶器のよつに白い。

年の頃は1・2・3だらう、全く面識はない上に名前が間違つている。

「名前……一文字しか合つてないよ。最後の『ス』、だけだ」

「ウソ？ だつて黒髪に漆黒の瞳の美女、つていつたらこの中じゅ

お前だけじゃん？」

肩をすくめる少年は、どうやら何かを勘違いしているようだ。

「わたしはグレイシャー＝ロータス。その……なんとかって名前のヒトじゃないよ」

「うつそだ！ だつてそうじゃなきや、このおにーさんとか綺麗なおねーさんとかが命かける理由、ないじゃん？」

命？！

はつとしてリッドを見る。

息を整えている彼は、唇をぐつと噛んだ。

「大丈夫、もうすぐクラウドさんと店長が帰ってくるから。それまでグレイスにもダイアナさんにも手出しさせない」

「リッド？！ 何でこんなことになつてゐの？！ 誰？ 何が目的的で……」

「目的はお前だよ、ラック＝グリフィス！ 黄金獅子ゲーティア＝グリフィスの末裔で、ケテルの腕を奪つた本人。僕達セフィラの間じゃあ魔界の王リュシフェルと契約したつてもつぱらの噂なんだけどなあ」

「？！」

言葉が理解できなかつた。

いや、一つ一つは分かつてゐる。リュシフェルはグリモワール王国時代に崇拜されていた最上位の墮天使で今でも信仰が厚い悪魔だ。セフィラって言つるのはセフィロト国に使える神官で天使を召喚する力を持つという、國中で10人しかいないう要職に就いた者を指す。それにしてもまるでこの少年がセフィラの一員であるかのような

口ぶりだ。

いや、百歩譲つてそうだとしても、自分がセフィロト国から狙われる意味が全く分からぬ。そして、リッドとダイアナさんがそれを命がけで止めようとする理由も。

もう何もかもが理解できず混乱していた。

「もう一人はすでに捕えてある。今頃ケテルが迎えに行つたはずだ

よ

「もう一人……？」

思わず眉を寄せた。

「ああ。マルコシアスの血を継ぎ、無類の剣の腕を誇つた悪魔騎士アレイスター＝クロウリーだ」

「……？」

その名にも聞き覚えはない。

それでも、直感的に分かつた。

「ウォルが……捕まつたんだね」

初めて会つた時から同じ傷の痛みを抱えていた。過去を知らずにいた。

でも、この街に来る前から彼と共にいたことは体全体で感じていた。心が叫んでいた。きっと、自分は彼と肩を並べて戦つていた「だからアレイスター＝クロウリーだつて言つてるだろ？ 分かんない奴だな。だいだいお前だつて絶対ラック＝グリフィスなんだからな！」

「わたしの名前を勝手に決めるな！」

腹の底から振り絞つて叫んだ。

もう痛みのせいでは動かなかつた。ずいぶん思考能力も低下している。

「とにかくさつさと捕まえて帰ろう。お前も国家騎士なら素人相手に手こずらないでよ」

「はっ。申し訳ありません！」

短く返事をした白い甲冑の騎士は、剣を構えなおした。リッドも集中して剣を握り直す。が、その体力が限界に近いのは一目瞭然だつた。ずいぶん長い間剣を交えていたのだろう。こうなつては本職の騎士に分がある。

やめろ、と叫ぼうとした瞬間、一本の剣が交差した。

白い甲冑を纏つた騎士の振り下ろした剣先が鮮血を導いた。

「え？」

思わず素つ頓狂な声が出た。

周囲の景色がスローモーションになる。

真紅を振りまきながら倒れていぐりッ。さらに追い討ちをかけよつとする騎士の姿を見た瞬間、何かが自分の中ではじけ飛んだ。

「やめろおおおつーー！」

額が焼けるように熱くなつた。

気がつけば、目の前には見たことのない風景が広がっていた。足もとには土の大地。色が濃いのはきっと雨が降っているからだろう。落ちる雨粒は見えるのに、自分は全く濡れていなかった。掌を上に向けると、雨粒が自分の体を通り抜けていくのが分かった。

「ここは、どこだらう?」

ふと辺りを見渡すと、折り重なるように倒れている人影が見えた。その下には真っ赤な染みが広がっていた。思わず駆け寄つてみると、そして触れようとして……思わず息を呑んだ。

これ……わたしだ

顔を血に染めて仰向けになつてているのは見慣れた顔だつた。そして、その上に覆いかぶさるように倒れているのは……この黒髪は、きっとウォルだ。触れようとしたが、もちろん手は一人を通り抜けた。

ウォルの背も真っ赤に染まつていて、その血の量からもう一人とも助からないだらうことはすぐに分かつた。

なんだろう?これは過去?それとも未来?それとも……ただの夢?

すると、倒れている自分の額に何かの紋章が浮かび上がつた。そこから銀の光が漏れる。

同時に、ウォルの右手首についていたチエーンのトップに掲げたコインの一つがきいん、と高い音を立てて粉々に砕け散つた。

倒れた二人を囲むようにして、一人の天使が現れた。

いや、天使ではない。

「申し訳ありません 我が主 マイ・ロード 希望を守ることはなりませんでした」

「マルコシアス 貴方のせいではありません
ですが リュシフェル……！」

「一人とも、悪魔だ。それも相当高位の。

リュシフェルという名は頂点に位置する悪魔につけられた名だ。
魔界を創造した王。丹精込めて作り上げられた美しい顔をゆるく波
打つ銀髪が彩つている。背には6枚の翼を湛え、絹のような質感を
持つ純白の布で織られた衣を纏っていた。

そしてもう一人のマルコシアスは戦の悪魔とも呼ばれた屈強な戦
士だ。鍛え上げられた褐色の肌に目立つ青と赤のオッド・アイ。黒
髪からは短い角が二本飛び出していた。翼は一枚。くすんだ紺のノ
ースリーブからはしなやかな筋肉の付いた腕が伸びている。
リュシフェルと思われる6枚翼の悪魔は悲しげに微笑んだ。

「世界は 崩壊するでしょう 私の力ももう幾許も持ちません
「リュシフェル」

「この二人を 巻き込んだことは 相違ありません せめて
リュシフェルの長い指が自分の 目の前で命を潰えようとして
いる少女の額にのびる。

まるで高名な美術家が造つた彫刻のように整つた顔立ちをした銀
髪の堕天使は、悲哀の色を浮かべていた。その表情に胸を打たれる。

「そのような事をすれば この少女は 世界は

必死に止めたマルコシアスは、鍛え上げられた褐色の肢体を紺の
服に包み、背に負つた純白の翼を一振りした。

「いいのです 世界の為に 一人が犠牲になればなどとは 愚かし
い考えでした」

「滅び行く悪魔達を どうなさるおつもりですか」

「諭しましよう 共に 運命を受け入れよと」

リュシフェルの言葉で、マルコシアスがその場に跪いた。

褐色の肌の戦士はその手を取り、そつと甲に口付けた。それは敬
愛のしるし。

「我が君の 心のままに」

「ありがとう マルコシアス」

リュシフェルの指が再び自分の額に触れた。

「どうかこの少女が 再びすべてを忘れ 平穏と安堵のうちに 生きられるよ！」

その指は額に紋章を描き出す。

そして、隣のマルコシアスは覆いかぶさるように倒れていたウォルの体をふわりと宙に浮かせた。

「アレイ 少女と共に生きよ その血を顧みず 心の望むまま左胸、ちょうど心臓のあたりから血が湧き出している。

その部分にマルコシアスの指が突き付けられた。

「アレイ 我が息子 悪魔と人の間に生まれた 中立の者」

そうして胸の部分に紋章を描き出していく。

額が熱い

焼けるよつた痛みと共に、田の前の景色が薄れていった。

次に見えた景色は、先ほどままで全く違っていた。
真っ白な視界はまるで霧でもかかっているかのようだ。体の感覚もあまりない。それは宙に浮いているからなんだろうか？
きょろきょろとあたりを見渡したが、どこも白くて何も見えなかつた。

「ヒヒヒー。」

すると、突然声がした。

「ルーク」

「？！」

何の前触れもなく目の前に莊厳な天使の姿が現れる。

「うわっ！」

「いざれにせよ もう逃れられぬのか」

「リュ、リュシフェル……？」

6枚の翼を背に湛え、頭上には金冠。流れ落ちる銀の髪が美しい

顔を縁取っている。先ほど自分の額に紋章を記した墮天使の姿だった。深い群青色をした瞳に釘付けになる。

「ゲーティアの末裔 これで一度目ですね」

「一度目? 会うのが?」

「契約の事ですよ ルーク」

「ルーク?」

「また首をかしげた。

「わたしの名前、多すぎてよく分かんないよ」

あの街に最初来た時はグレイシャー＝グリフィスだった。そのうち、結婚してグレイシャー＝ロータスになった。でも、セフィロト国の大騎士と共に現れた少年はラック＝グリフィスと呼んだ。

そして今、目の前のリュシフェルはルークと呼ぶ。

「過去を知りたいですか ルーク」

「ううん、いらない。だってわたしにはウォルがいるから」

「そう言つと、美しい悪魔は微笑んだ。

「でも 私を呼んだでしょう」

「……呼んだ? わたしが?」

「ええ 助けて欲しいと 力が欲しいと」

「そう言われて口を噤んだ。

聖騎士に斬られ、深紅を散らした青年の姿を思い出す。確かにそうだ。あのままじゃリッドが……

「ねえ、リュシフェル。過去のわたしはリッドを助ける力、持つてた?」

「ええ」

「じゃあ、過去を思い出せばリッドを助けられる?」

「それは 貴方次第です ただし」

リュシフェルはそこでいつたん言葉を切つた。

「ただし……何?」

「再契約は 時の終わりを意味します」

「時の終わり? なんだろう、それは。

「人は古い 最後には滅し 魂は廻ります しかし 悪魔は違う
未来永劫 ただそこに在り続けるのです」

「今ここで契約したら年をとらなくなるってことかな?」

「そうです」

少しだけ、考えた。

でも 結論は出ているようなものだつた。

「きっとここで契約しなかつたら、リッドが危ないんだよね
年をとらなくなる。永劫の時を生きることになる。
そんなもの、リッドの命には代えられない。」

「するよ。契約。力を貸して、リュシフェル。わたしは まだ大
切なものを失いたくない」

そう言つと、リュシフェルは悲しそうに微笑んだ。

「永劫を 生きるのですよ」

「いい。そうしたらずっとウォルの傍にいられる。わたしが先に消
えてウォルを悲しませることがない」

まっすぐに群青色の瞳を見詰めた。

リュシフェルは穏やかに微笑む。

「迷いのない 強い瞳です 貴方ならきっと」

「家中には子どもたちもいるんだ。守りたい。捕まつてしまつた
つていうウォルも助けたい。だから……力をください」

もう一度はつきり言つと、リュシフェルはその細い指を額に伸ば
した。

「加護を 与えましょ」

その瞬間、凄まじいまでの情報の奔流が頭の中に流れ込んできた。

精神がはじけ飛ぶかと思つた。

堰を破壊された濁流のように全身を貫いていく映像、音、そして感情。

「うわああああ…」

怒り、悲しみ、憎しみ……すべてが一気になだれ込んできた。抑えきれない衝動が駆け巡る。

「アレイ、さん……！」

喉の奥から洩れた咳きは、真っ暗な意識の海に溶けて消え去つた。

気づいた時にはすでに狭い塔の中で暮らしていた。

簡素なベッドが一つ、勉強用の机が一つ、そしていくらかの筆記用具。それが自分の世界のすべて。毎日日記をつけるのだけが樂しみだつた。

粗末な服では、冬になると手も足も悴んで霜焼けが出来た。

食事は日に一回、リリイという世話係の女性が運んできてくれた。自分の唯一の話相手だ。さらさらとした黒髪にオレンジの瞳をしたリリイはいつもいろんな話を聞かせてくれた。

机の上に置く花の鉢をくれたのもリリイだつた。彼女と同じ名を持つ花、百合。漆黒の色をした珍しい百合の花は自分の生きる支えになつた。漆黒の花弁にオレンジの薬やくを飛び出させた百合はリリイそつくりだつた。

狭い部屋で、本を読み、リリイの話を聞くだけの生活。

リリイは悪魔のことを教えてくれた。魔界に住み、不思議な力を使うことができる彼らは凡喫こ応じて「おのの世界にやつてくるのだという。

「魔界の王リュシフェルはもと天使だったの。天使の住む『天界』に悪魔の存在が増えてきたことで、悪魔たちに天使たちとは違う新しい世界を提供したの。それが彼の創った『魔界』という場所」

「リュシフェルは悪魔たちを助けたんだ」

「そう。そして彼に賛同した多くの天使を引き連れて魔界へ下った。その中にはメフィストフェレスやベルゼブブといった名だたる悪魔たちが含まれていたわ」

悪魔たちが生きるため、魔界を創ったリュシフェル。彼に会つてみたいと思うようになるまでそう時間はかからなかつた。

ただ、遠く小さな窓を見上げて名を呼ぶだけ。いつもそりとリリィが教えてくれた、もう一つの彼の名　自分と同じ名前を。

「ルシファ」

だから知らなかつた。

いつも小さな窓から見る空があんなにも広かつたことを。あんなにも近かつたことを。

初めて塔から出たのは15歳の時。

空の広さに驚いて、風の温かさに心躍らせた。

もちろんそれは一瞬で。

すぐに塔よりもっとずつと暗い地下の部屋に連れて行かれた。

「リリィ？」

隣を歩くリリィは全く反応せず、無言のままに自分を地下の部屋に置き去りにした。

壁まで光が届かない闇に満たされた部屋の中に浮かぶ、禍々しい魔方陣。揺らめく蠅燭の炎がいつの間にか現れ、自分の周囲を取り囲んでいた黒衣の人たちを浮かび上がらせている。

自分はその中央にうつぶせの状態で大の字に拘束されてしまった。身に付けているのは薄い短衣だけ。肌に触れる石の床はひどく冷たかった。轡を噛まれ両手足を頑丈な鎖でつながれている今、外部

からの干渉に抵抗することはできない。

凄まじい恐怖が全身を貫いた。

風も無いのにふわりと揺れる蠟燭の明かりを、銀のブレイドが反射した。

一体これから何が起こるのか分からない。叫ぼうとしたが声は出せず、ただ喉から湿っぽい呻きが漏れただけだった。

銀の煌きがこちらに向けられる。

逃れる術はない。

動けない。

次の瞬間、仰け反るような激痛が背に走った。

轡をかまれ、声にならない苦痛が全身を貫いた。激痛で手足ががくがくと震えた。目がかすむ。両手両足を拘束する鎖は絶望的に頑丈だった。

ところが、最後の視界に光が溢れる。銀色の柔らかな光だった。銀の光に癒され、拘束も解かれ、手足が自由になった。

いつたい何が起きたんだろう？リリイはどうだろう。そしてここは？銀の光は何？

が、周囲の人たちから殺気が放たれる。

「リュシフェル様の贊となれ！」

「その命でもって誓いとせよ！」

放された殺気にぶるりと震え、自分の背後を見上げる。

そこには美しい6枚の翼を湛え金冠を頭上に戴いた天使の姿があつた。いや、違う。

これはリュシフェルの召喚。わたしはその贊となるためだけに育てられたのだから。塔の中で、ほとんど外界に触れることなく。

とにかく刃物をこちらに向けた人たちの殺気だけは敏感に感じ取れた。このままでは、自分はこのヒトたちに殺されるだろう直感でそう感じ取つてくると銀のブレイドに背を向けた。銀の光を放つリュシフェルは何も言わなかつた。

周囲は闇なのに、なぜか自分はある方向に駆け出した。
誰かに呼ばれている気がしたから。

壁に行き着いたその闇の中には、さらに闇へと続く階段が口を開けていた。この先に自分を呼んでいるものがいる気がする。後ろから追いかけてくる人たちから逃げるように、転がるようにな階段を下った。気の遠くなるような逃避行の後、たどり着いた部屋には明かりが一切なかつた。

それでもなぜか感覚に敏感に触れる何かがそこには存在していた。導かれるように手を伸ばすと、何かが指の先に触れる。石か何かでできた台の上に丸い形状の薄い物体が乗っていた。ひんやりとしたその感覚はなぜか心を落ち着けていく。

手にとつて握り締めた。

……名を呼んデ

すると、突然頭の中に声が響く。

声の主は分からぬといつに、口が勝手に動いていた。

「グラシヤ・ラボラス……」

その瞬間闇の空間におぞましい悪魔の姿が現れた。

漆黒の毛並みに埋め込まれた炎妖玉の瞳がぎらぎらと輝いている。口元から見え隠れする牙は、まぎれもなく殺戮者のものだつた。背には膜翼が広がつてゐる。

牙が引っ掛けたのか、たどたどしい口調でその悪魔は口を開いた。

「久しぶリダ 契約ナンて」

「あなたは……誰？ 悪魔さん？」

「僕力イ？ さつき呼んだジャないカ」

そう言われて、先ほどのことを思い出す。暗闇の中、何かを握りしめて叫んだ名。

「グラシヤ・ラボラス……？」

「そうだヨ 君の名ハ？」

「……ルーク」

「ルーク どうヤツテ 殺シテ欲シイ?」

当たり前のようにな聞かれて戸惑つた。

いま目の前の悪魔は、殺してほしい?って聞きはしなかつたか。

「ひとりともイイけど 僕 退屈シテタんだ 遊んでクレル?」

そう言つと、グラシャ・ラボラスと名乗つた悪魔は突然姿を変えた。

「!」

鍛え上げられた褐色の肢体を黒衣に包んだ青年……いや、少年か? 黒髪からは短い角が2本飛び出している。さらに背中の膜翼は消えていなかつたし、にやりと笑うと口元からハ重歯のような犬歯が飛び出す。褐色の手、細い指の先には長い爪が伸びている。

「君ハ 心の底ニ ゼツ望を背負つテいる」

「……?」

「ソレは 何が 原因?」

何を聞かれているのかが分からぬ。ただただ首を傾げた。すると、悪魔は楽しそうに笑つた。

「フフ ルーク 僕ト 契約しナイか」

「契約……?」

「大丈ブ 君はたダ 名を呼ベバいい 僕ノ 真実の名ヲ」「真実の……名?」

「呼んで そうスレば 僕ハ 君の望ミを 叶エヨウ」

そうして褐色の肌の悪魔はそつと耳元に唇を寄せた。

囁くように美しい名を告げる。

「君ニ 新シイ セ界を あげヨウ 君の ノゾムママ」「新しい世界つて?」

「キみが 希望ヲ 持テルような 世界サ」

「希望つて……何?」

そう言つと、嬉しそうにした褐色の肌の悪魔はぐい、と顔を近づけた。額が触れそうなくらい。炎妖玉の瞳に自分の顔が映るくらい。この悪魔が喋るたび、鋭い牙が見え隠れしている。

「不シギだ　君ハ　何色ニモ　染マッテイナイ」

「……？」

「つまり　きミは　これカラ　何イロにでも染マルんだネ」
嬉しそうな悪魔のくつきりとした目に釘付けになった。どこか少
年の幼さを残す彼は非常に美しい顔だちをしていた。

しかしその言葉の意味はひどく理解しづらい。

「何を言つてるか分からぬよ？　……カークリノラース」
名を口にしたその時が、契約を結んだ瞬間だつた。

「僕ノ　いろニ　染メテあげヨう」

悪魔は嬉しそうに笑いながら背の膜翼を広げた。

SELECT · 11 カーブリノラース（後書き）

多忙のため、一時更新を停止します……楽しみにしてくださいとい
る方（いらっしゃるのか？…）「めんなさい。

次回は2田2田から3田になると思います。

代わりと言つてはなんですが、HPのWEB拍手で番外を読みます。
PCのひとつはどうぞ「ひとつだけ」
http://sky.associties.jp/lostcoin_ht/

’08 01 26 早村友裕

全身に高揚感があふれた。目の前の悪魔の姿は消え、手の中に握り締めた薄く丸い物体が熱を帯びていた。

相変わらず目の前は真っ暗闇だったが、足元の感覚から大人たちから逃げて飛び込んだあの暗い部屋に戻ったことが分かった。ところが、足を踏み出そうとするとき自分の意志で体が動かないことに気づいた。

「流石 あいつの子孫ナダケある このカラダは使いヤスい」

自分の喉から自分のものとは違う声が漏れる。

手の中にあつた熱い何かを服のポケットにしまつと、

「さア ハジめよう」

自分の体をのつとつたカークリノラースはにやりと笑つた。

カークリノラースは凄まじい速度で先ほど降りてきた階段を駆け上がつた。

「ねえ、カークリノラース

「何ダい？ ルーク」

名前長いから、ラースって呼んでもいい？

そう言つと、悪魔は一瞬口をつぐんだ。

階段の途中でなぜかいったん停止する。

「いいヨ 好キニ シタラ？」

「ありがとう

そう言つと、カークリノラースは……ラースはもう一度階段を駆け上がつた。

あの、銀の光があふれる部屋へ。

まばゆい銀の光に、一瞬目がくらむ。

が、次の瞬間には、口元に何かを噛み碎いた感触とぬるりとした

生暖かいものがかかる感覚があった。

いつたいなんだろう?

視界が戻つてくる。

最初に見えたのは深紅。

え?

手足の感触、全身にかかる負荷から、垂直な何かにしがみついていることが分かった。

口の中を生暖かく独特のにおいのする液体が満たしていく。蹴り飛ばすようにしてラースが離れたそれは、まぎれもなく人間の体だった。

「フフ 全部 壊シてアゲよう」

先ほどまで魔方陣を取り囲んでいた黒いロープの大人だ。

今はフードが外れ、真っ赤な血をまき散らしながら仰向けに倒れていた。その眼は恐怖によつて大きく見開かれている。

ラースはそれに目もくれず、さらに次の標的に向かう。黒いロープをまとつた数人の大人たちはうろたえ、壁際に追いつめられていつた。

「あいつノ末裔 滅ぼシていい力ナ?」

ラースの声が薄暗い地下の部屋に響く。

口の中に残る生暖かいぬるぬるとした液体はヒトの血だ。

背後に佇む銀の光を纏つたリュシフェルに目をくれる事もなく、地を蹴つた。

一瞬で目の前に黒いロープが迫る。

目の前が真っ赤に染まる。

耳をつんざくような悲鳴が鼓膜を揺らす。

恐怖に震える暇もなく、数名の大人が血の海に伏した。

「まだ 上にイルね」

ラースの声が響く。

次の瞬間には天井が音もなく消失した。

背に何かが広がる。視界の隅をかすめたそれは漆黒の膜翼だった。

いつたい今、何が起きている？

全く何も分からぬまま、ただ真つ赤に染まる視界を認めてしまつていた。

ラースは真つ暗だつた空間から明るいホールに着地した。足もとには真つ赤な絨毯が敷かれ、吹き抜けになつた天井には綺羅めかしいシャンデリアがいくつもの明かりを灯している。見渡すと目の前には全面に張られた窓。その向こうには丁寧に手入れされた庭が広がつている。

西に傾いた橙の陽光が窓全体から差し込んでいた。

女性の悲鳴が響き渡る。

「グラシヤ・ラボラスが！」

「殺戮の悪魔が目覚めた！」

それを聞いたラースはにやりと笑う。

未だぬるぬると気持ち悪い感触を残す唇をべろりと舌でなめ、悲鳴を上げた女性に狙いを定めた。

「ダイじょうブ 一人ダッテ 逃サナイ」

凶器と化した牙が女性の首筋に食い込む。

飛び散つた血が自分の顔にかかる。生ぬるい感触を与えた。

視界に映る手も真つ赤に染まつていて。簡素な短衣もじつとりと濡れて重くなつていた。

「なぜ贊にえが殺戮の悪魔を呼び覚ましたんだ！」

「リュシフェル様は？！」

逃げ惑う大人たち。

ラースは何の躊躇もなくそれに飛びつき、牙にかけ、床に沈めていく。時に四足で長い廊下を駆け、剣を手にした大人たちさえも嘲あざ笑うように殺戮を重ねていつた。

大人だけではない。時折見られた子供の影も、ラースは容赦なく血の海に沈めていく。

眼に映る人間をすべて殺戮の牙にかけてからラースがふつと動きを止める頃には、もう感覚などなくなっていた。

目に映るのは深紅のみ。

動くものなど一切ない静けさの中に、自分は一人佇んでいた。ふと見た窓の外に、黒い石造りの塔を発見する。

あれには見覚えがある。

あれ、わたしの塔だ

生まれてからずつと閉じ込められていた塔。寒い時期には小さな手足を悴ませ、震えながら暮らした塔。

「アレも 壊ソウか？」

ラースが問う。

一瞬心が揺らいだ。
が、思いとどまる。

いい。あれは、リリイとの思い出がたくさん詰まっているから「ソウ？」

ラースは塔から視線を外して歩き出した。

廊下は凄まじい数の死体で埋め尽くされている。
むせ返るような血の匂いが麻痺したはずの鼻をつく。
やつと少しずつ感覚が戻ってきた。
背筋がぞくりとする。

この人間を倒したのは全部自分。惨劇を作り出したのは自分。何人も、何人も死んでしまって……

ひくりと全身が引きつる。

もつとも、体の支配権を持たない今はその感覚だけが全身を駆け抜けたが。

「どうシタの？ ルーク」

「ラース、みんな殺しちやつたの？」

「そうダヨ だつてキミの世界ヲ 壊スと言つたダロウ？」

その言葉に、ざあつと血の気が引いた。

足元に転がる元は人間だつた塊。全身を濡らす深紅の液体。口の中に残る感触。

すべてが自分の犯した事実を物語つている。

ところが、事の重大さに気づいてもつ一度思考が停止する前に、ラースの声が響いた。

「もうヒトリ 残ツテた」

視線の先にいたのは 黒髪にオレンジの瞳を持つ女性。

ずっと自分の話相手をしてくれていたリリイだつた。

「逃セナイよ」

ラースが構える。

地を蹴る。

大きく目を見開いたリリイが目の前に迫つた。

やめて！

思わずそう叫んでいた。

その瞬間、ばちん！と大きな音がして急激に体の感覚がリアルになつた。

どさり、と床に倒れ落ちる感覚があつた。

「何ダヨ 邪魔シナイでよ ルーク」

「このヒトは、だめ……」

体中血にまみれて力は全く入らない。なんとか顔をあげるのがやつとだつた。

もうすでにたくさんのヒトを手にかけて、今セリビアヒツムな

かつたけれど、これだけは譲れなかつた。

そこでやつと自分の声が出せたことに気づく。

はつとすると両手足の制御権が自分に戻つていた。

田の前には黒い毛並みの狼が炎妖玉の瞳をギラギラとさせてこちらを睨んでいた。その強大な威圧に背筋が凍る。

「ル、ルーク……」

リリイがかすれた声を出す。

その顔は恐怖にひきつっていた。

「ラース、やめて。リリイだけは……やめて」

「例ガイは 認めナイよ」

がたがたと震えているリリイはすでに壁際まで追い詰められている。

「やめて……大好きな……ヒトなんだ」

狭い狭い世界で、唯一自分の味方だったヒト。

動かない体を無理やり動かしてリリイのもとへ向かう。

ところが、リリイの口から出たのは信じられない言葉だった。

「いや……近寄らないで……！」

恐怖に震えるオレンジの瞳が恐れているのは、まぎれもなく自分

ラースに乗っ取られたとはいえ、自らの肢体を使ってこの屋敷にいたすべての人間を葬り去った自分。

その瞬間、自分の中の何かが壊れた。

「リリイ……」

伸ばした手は真っ赤だった。

「来ないで！」

おびえる彼女はがたがたと震えながらも氣丈に叫んだ。その瞳は完全に自分を拒絶していた。

「もういや！ あんたの世話なんてやりたくてしてたわけじゃないわ！」

「…………え？」

リリイの口からほとばしつた言葉に、思わず声を失った。

「本当は私が選ばれてたはずだったのよ！ リュシフェル様にこの身を捧げて……私は新しい世界を手に入れるはずだったのに！ あんたさえいなかつたら……！」

初めて聞く激しい言葉。

心の底から混乱していた。

「リリイ……」

「わたしから何もかも奪つて！ しかもそれに気付きもしないで！」

鋭い棘を持つた言葉が次々に自分の心を裂いていく。

自分がリリイの欲しかつたものを奪つた？ リリイはいつたい何がほしかつたんだ？ どうして自分にこんなにも敵意を向けているんだ……？

もう体を起こすのも辛いほどに全身の力が抜けていた。

最後に見えた視界で、リリイがオレンジの瞳に憎しみをこめてこちらを射抜いていた。

唇が動く。

最期に聞いたリリイの言葉は、確実に自分の胸を貫いた。

「大嫌い」

ダイキライ

そこで、意識がいったん途切れた。

目の前が真っ赤に染まっている。

口の中がキモチワルイ。既に大量の血を飲み込んでしまったようだ。

酷使した手足は動かず、精神は完全に破壊されていた。

「リリ……イ」

どうにも頭が働かなかつた。

自分は、何もかも失つた。

リリイは、自分を大嫌いだと言つた。自分は世界を完全に破壊しつくした。

伏せた床が冷たい。絨毯だというのに真っ赤な液体を吸い込んでいるからだ。手も足も頬も髪もすべてが血の色に染まっている。

霞む視界の中映るのは、吹き抜けのホールに作られた全面の窓と長い階段

「愛しき子 全て忘れなさい」

ふと、優しく悲しいテノールが響いた。

顔を上げると銀髪の天使が微笑んでいた。

6枚の翼が闇に浮かびあがり、彫刻のように整つた顔立ちからは深い悲しみが感じられた。

「忘れなさい 殺戮も グリフィスも 契約も」

白く細い指が額に伸びる。

触れた途端に額が焼けるように熱くなり、全身を雷撃が貫いたような感覚が襲つた。

「ルシ……ファ……」

最後の喰きは闇の中吸い込まれるように消えていった。

次に目を開けたとき見えたのは金色の太陽の色。

「目が覚めたかしら？」

長いブロンドの髪を揺らした金目女性が自分を覗き込んでいた。何だろう。

自分の中には何もなかつた。

「……ああ……う」

声が出た。

しかし、自分の中にそれ以上のものはなかつた。

ただ、光のように眩しい金の髪に手を伸ばし、つかもうとした。

「どうしたの？ 惨いの？」

言葉は何となく理解できたが、自分の喉からきちんと整理された言語を発する事が出来なかつた。

頭の中全体に霧がかかつたようにぼんやりしている。

今までの記憶がすべて喪失していた。
そして、まるで喋り方まで忘れてしまつたように何も浮かばなかつた。

「大丈夫よ、もう大丈夫よ……」

その女性は優しいメゾソプラノでそう言いながら、自分を強く抱きしめてくれた。

初めての　温かな感触だつた。

その時自分は過去を失つていた。リリィのことも、殺戮の事も塔で暮らし育つた十数年に及ぶ歳月も　唯一残つていたのは手の中にあつたコイン。

金の目をしたブロンドの女性は自分に名をくれた。「L-U-C-K」　ラック。古代語で幸福を意味するその名を何度も何度も呼んでくれた。

言葉すらも忘れた自分に様々な事を教えてくれた。

そして、一人で暮らし始めて1年ほどたつた頃、その女性は自分

に職もくれた。

そこからずつと幸せな生活が続いた。

その女性 いつしか親しみをこめてねえちゃんと呼ぶようになつた彼女にもらった色は『探索者』、つまりは情報屋の下請けだった。

小さな街の片隅で情報屋を営むねえちゃんのもとで、毎日街中を駆け回つて情報を集める生活が続いた。優しいヒトたちに囲まれて、ねえちゃんに守られて……この世界がそんなに優しくないって、知つていたはずなのに。

ある日、いつもと同じ街の片隅で見たことのないヒトに出会つた。美しい顔をした銀髪の青年 それは、自分の過去を刺激した。

暗闇に浮かぶ銀髪。血の匂い、銀色に光るブレイド……様々な要因は重なり合つて自分を過去へと引きずり込もうとしていた。

そんな中で、ねえちゃんは自分に新しい職をくれた。

それは、国家天文学者『レメゲトン』。情報屋だと思つていたねえちゃんは実は国家から派遣された天文学者だったのだ。彼女に連れられて自分は小さな街を出て王都に向かつた。

自分が最初から握りしめていたコインは悪魔を召喚するためのもので、もともと国家がすべて管理していたのだという。初代国王が魔界から悪魔を召喚し、その契約の証として72枚のコインを作つた。

自分が持つのはその中でも「殺戮と滅びの悪魔」と呼ばれるグラシャ・ラボラスのものだ。

あの日出会つた美しい顔をした銀髪の青年は自分の住む国の敵国の神官だった。自分たちが悪魔を使役するのに対し、彼らは天使を召喚し、戦う。

天使を召喚する彼らとの戦いに、巻き込まれていった。

その中で、彼に出会った。紫水晶の瞳を持つ、あのヒト^{アメジスト}。

同じ「レメゲトン」の称号を持つあのヒトは、とてもイジワルなヒトだと思った。無愛想だし、辛辣な台詞ばかりを投げかけてくる。つまり自分は嫌われているものだと思っていた。

ところが、それは違っていた。

彼はとても優しい心をその裏側に隠し持っていた。迷った時はいつも導いてくれた。

いつしか自分は彼にそばにいて欲しいと願い、自分は彼の傍にいたいと願うようになっていた。

もつともその時はその感情に名前を付ける術を持たなかつたけれど。

ねえちゃんと彼は、自分の世界のすべてになつた。

ところが、自分たちと銀髪の神官たちとの争いは、いつしか国同士が争う戦争として顕在化した。

ねえちゃんと、紫の瞳の彼と、自分。肩を並べて戦つた。

コインを使って悪魔を召喚して、天使を召喚した神官たちと激しい戦闘を繰り広げた。

ところが。

やつぱり世界はそんなにも優しくなかつたんだ

神官の一人を倒してねえちゃんと彼のもとに駆けつけた自分を待つていたのはあり得ない現実だった。

ねえちゃんと、死んだ

敵の神官の攻撃に倒れ、命の灯を消してしまつたねえちゃんを前に自分がとつたのは、以前と同じ行動だった。

「壊して。全部」

世界を壊そうと思った。そう願つたわけではなかつたが、そうなつてもいいと思った。

「ラース……！」

そう呼ぶと、以前自分の世界を完全に破壊しつくした悪魔は現れた。

黒い毛並みの狼。炎妖玉^{ガーネット}の嵌め込まれた眼、全身から噴出す殺氣とも呼べる鋭い気、闇を思わせる毛並みと禍々しい膜翼。何も変わつていなかつた。

出会つた時から変わらないたどたどしい言葉でこう言つた。

「待つてタよ ルーク 君の心が 絶望一染マる ロのとキガ 待ち遠シかつたヨ」

そこからはまた繰り返しだ。

ラースに乗つ取られた自分は目の前にいる神官を殺そうとした。周囲をめちゃくちゃに破壊し、巻き込まれる者達をすべて葬った。また、自分は世界を破壊しつくすのか。

ところが、そんな自分に届いた声があつた。

深いバリトンの響き。

自分の名を呼ぶ声。

「ラック！」

その声は、自分を現実に引き戻した。ねえちゃんを失つた世界にはまだ大切なヒトが残つていた。自分は世界の破壊をまぬがれた。

そうして世界を破壊しかけた自分は、もう一度彼と一緒に戦つた。今度は、自分の住む世界を守るために。これまで支配されるばかりだったラースの力すらも制御して。神官たちをすべて倒すことに成功した。

大切な、大切なヒトは傷ついた自分を抱きしめて、囁いてくれた

「愛している」と。

その優しい腕に抱かれて、何もかもをゆだねた。本当に幸せだった。

覚えているのはそこまでだ。

戦場の真ん中で想いを確かめ合つた時、とどめを刺し損ねた神官が自分と彼を剣で一つに貫いた。

自分の心臓には深い傷が刻まれ、彼も同じように

ふわり、と体が浮く感触があった。

ゆつくり田を開けると田の前には莊厳な天使の姿があった。

いや、違う。これは

「ルシファ」

思わず微笑みが漏れた。

ゆるく波打つ銀髪が彩る頬は、悲しみの色に染まっていた。

「これは 私の罪 ルーク 貴方を巻き込み 絶望へ突き落したのは 紛れもなく ジの私」

悲しみに染まるテノールが直接頭の中に響く。

しかし、自分はそれを聞いて首を横に振った。

「違うよ。ありがとう、ルシファ」

そんな風に悲しまないでほしい。傷つかないでほしい。

「ずっと……おれの事、守ってくれてたんだね」

すべてを思い出した今、自分の人格はねえちゃんと共に過ごした頃に一番近いだろう。

ウォルと過ごした2年近くももちろん覚えている。愛し合い、共に暮らしたこと すべて、忘れ去っていた過去の自分が切望していたこと。

それでも、自分が一番大きく成長したのはあの4年間だったから。記憶をなくしてねえちゃんと拾われ、そして彼に出会った世界。何をかけても守ろうと誓っていた世界。

「グリフィス家を全員惨殺したことを忘れさせたのも、戦場で一回死んじやうところだったのを生き返らせて幸せな暮らしをくれたのも、今ここで力をくれるのも……全部ルシファだつたんだ」

いつだって世界は自分に微笑みかけてなどくれなかつた。

でも、この自分はこの世界が大好きだつたんだ。何を賭けても守りたいと切望するほどに。

「お願ひだよ、ルシファ。力を貸して。おれの手じゃ…… ジの世界を守れないんだ」

そう言つと、ルシファは悲しそうに微笑んだ。

完璧なまでに整つた顔立ちに悲哀の色を浮かべたその姿に釘付けになる。

「いつも 貴方は そう願っています 自らの望みでなく 相手の望みをかなえようとする」

「違うよ？ おれはいつだつて自分の望むことをやって来た」

今世界を守りたいと思うのだつて自分の意志だ。

「だから 私は貴方を選びました 光の子 ルーク

「ルークって言つるのはルシファの愛称だ。ルークって、おれの事じやなくルシファの事じやないか」

「私の事を そう呼ぶ者もいます」

「おれはラックだよ。それか、グレイスだ。ねえちゃんが、アレイさんが呼んでもくれた名だ」

それ以外の名はいらなかつた。

グレイシャー＝ルシファ＝グリフィスも、ルークも。

ラック＝グリフィス。それと、グレイシャー＝ロータス。この二つだけが自分の名前だ。

「リリイはさ、おれのこと嫌いだつたんだね。本当ならリリイがルシファと契約する予定だつたんでしょう？ それが、何故かおれになつた」

「彼女は 貴方の従姉にあたる 末裔でした しかし 私はルーク

貴方を選んだ」

「だからリリイはおれのこと嫌いだつたの？ リリイの役目をとつちゃつたから？」

「いいえ 私が貴方を選んだ事が 原因です」

ルシファは悲しげに微笑んだ。

その哀愁に一度沈黙を任せてから、ふと口を開いた。

「ねえ、ルシファ。最後に一つだけ聞いていい？」

群青の瞳がこちらを向いた。

あの銀髪の神官と同じ、深い色。

「ルシファはおれと契約して、何をするつもりだったの……？」

そう問うと、美しい堕天の悪魔は口を閉ざした。

代わりに白い手がこちらに伸ばされる。

滑らかな手触りの指が頬に触れ、微かに撫でていった。

「この契約で 貴方は時を失います そうなれば いざれ 選択を迫られるでしょう」

「……？」

その言葉の意味が分からず首を傾げると、ルシファは笑った。
「重い枷を 背負わせるかもしれない それを逃れるかもしれない
世界が崩壊するか否か」

「ルシファ、難しいよ。もう少し分かりやすく言つてよ」

「私は喜んで 貴方に力を与えましよう 望む限り」

6枚の翼を湛えた墮天使、魔界の長リュシフェルは大きく翼を振つた。

周囲に少し漆黒の色が混じつた羽根が舞う。

「いつか貴方は知るでしょう 世界を統べる理を 互いの世界を繋ぐ
関連性を」

「ルシファ、答えになつてないよ！」

思わず伸ばした手は、その墮天使に届かなかつた。

「行きなさい ルーク 貴方の望むままに」

「ルシファ！」

「貴方の大切な人が 待つていてます」

その言葉ではつとする。

そうだ、今この瞬間にもリッドが危ないんだ！

アレイさんも囚われている。記憶をなくして悪魔の力もなくした
アレイさん。

彼がいかに剣の達人といえども、2年のブランクは長すぎるはずだ。

「ありがとう、ルシファ」

「永劫の先に 幸福が待っていますように」

ルシファのテノールが消え入らないうちに、田の前に景色がかすんでいった。

少しずつ手足の感覚が戻ってきた。

目を開けると、遠くに見えるのは倒れ込んだ青年に向かつて剣を振りおろそうとする聖騎士の姿。

「やめろおおおつ！－！」

心の底から叫んだ。

同時に地を蹴った。

先ほどまでの下腹部の痛みや倦怠感は一瞬にして取り去られていった。全身を覆う高揚感 懐かしい、加護の感覚だった。

ルシファの加護を受けて飛躍的に向上した身体能力のおかげで、ほんの一足飛びに二人の剣士の間に滑り込むことが出来た。

千里眼！

同時に全身の感覚を開放する。

研ぎ澄ました感覚は周囲の世界の時をゆっくりと回転させた。止まっているように見える剣筋を、横からの蹴りで吹っ飛ばす。

同時に反対の足で聖騎士の腹を蹴り飛ばした。

その瞬間にスロー・モーションだった世界が通常の空間に戻る。

「ぐえつ！」

潰れたような声を出して後ろ向きに吹っ飛んだ聖騎士は、地面を滑り、最後にはぴくりとも動かず地面に伏した。

それを見届けてから、もう一人の少年に目を向ける。

「……えつ？ 何？ 何でここに？ ていうか今何が起きたの？」

少年は田を見張っている。

おそらく少年にはリッドに止めを刺そうとした聖騎士が何の前触れもなく吹っ飛ばされたように見えたろう。

「じめん、おれやっぱリラック＝グリフィスだつた」

とりあえず少年に謝ると、彼はきゅっと眉を寄せた。

「何言つてゐるの？ 訳わからんないし」

すると、背後から震える女性の声がした。

「……ラック？」

一瞬迷つたが、すぐ振り向いた。

彼と同じ紫の瞳をした美しい女性が地面にへたり込んでいた。
「ごめんね、ダイアナさん。ありがとう。ずっと……一緒にいてくれてたんだね」

「ラック……そう、思い出してしまつたのね」

「うん」

ダイアナさんは、とても複雑そうな顔をしていた。

「リッドをお願い。すぐ、手当をしてあげて。おれは あいつを倒すから」

見覚えのある神官服はセフィロト国のだ。

おそらくあの少年は天使を召喚し使役するセフィロト国の中の神官『

セフィラ』の一員だろ。

「それからアレイさんを助けに行く」
強い気持ちでその少年と対峙した。

いつたい何番目 のセフィーラだろ?」

黙つていれば美少年だと大絶賛してもらえるだろ?、美しい琥珀色の瞳と対照的に新緑を思わせる淡いグリーンが混じつた銀髪と陶器のように白い肌。年の頃は12・3に見えた。

白い神官服に身を包んだ少年は不機嫌そうに眉をしかめた。

この年ごろにありがちな、年上の者を小馬鹿にするような態度をとつていることは一目でわかつた。

「よく分かんないな、お前、言つてることがめぢやくぢやじやん! そんな事を言われても、実際先ほどまでは違うと思つていたのだ。何をどう言われてもどうしようもない。」

「「めん、さつきまではずつと忘れてたんだよ」

「はあ? なにそれ。意味分かんない」

正直に返したのに、少年はますます唇を尖らせた。

「ま、いいや。とにかくお前がラック=グリフィスだつてことは間違ひないんだよな」

「うん、そうだよ……ところで、きみはだれ?」

そう聞くと、少年は一度だけにこりと微笑んだ。天使のような笑みが零れて思わず視線を囚われる。

「ボクはセフィラ第2番目、コクマ。使役するのは知恵の天使『ラジエル』」

まだ変声していない少年の声が天使の名を呼ぶと、その場を暖かい光が包み込んだ。

天使『ラジエル』の召喚 少年の背後に大きく翼を広げた天使の姿が現れた。知恵の天使ラジエルは、至高の父とも呼ばれ非常に情の深い天使であるというのが通説だ。

それなのに、目の前にいるこの天使から放たれているのは十分すぎるくらいの鬪氣だつた。

ルシファと同じ容姿をした美の天使ミカエルや、折れそうに華奢だった勝利の天使ハニエル、灼熱の毛並みを持つ豹の姿をした峻厳の天使カマエルとは全く違う。まるで剛腕の戦士のように鍛え上げられた肉体に、大きな翼が生えていた。

「ラジエル、あいつ捕まえたいんだけど」

「コクマと名乗った少年が背後の天使にそう告げると、ラジエルはさらに闘気を強めた。

ルシファの加護がなければすでにこの場を飛び退っていたかもしれない。

何しろ自分は丸腰なのだ。ルシファの加護があるとはいえ、武器の有無は生死に直接かかわつてくる。

ジワリと額に浮かぶ汗を感じながら、コクマとその背後の天使に集中する。

相手から目を離すな。感覚を研ぎ澄ませ。

コクマが少し首を傾げる。その仕草はため息が出るほどに愛らしい。

「悪魔の加護を受けてるみたいに見えるな。その悪魔、いったい誰？」

「リュシフェル 姿を見せよ」

コクマの代わりにラジエルの声が響いた。

重く深い、それでいてどこか悲しげなその声は空氣を伝わるのでなく、直接頭に響いてくるかのようだった。

自分の背後の空間がゆらりと揺らめく。

そして、6枚の翼をもつ墮天の悪魔が姿を現した。

「久しいな リュシフェル お前が 天を別つて数百年 終に 世界は崩壊した」

「いいえ 未だ 崩壊していません 希望は潰えていない」

ルシファの言葉に、ラジエルから闘気が放たれる。

「未だ言つか 人の子を巻き込み その命を弄び さらに運命を捻じ曲げても」

「それでも、存続を願う心が、私を呼び覚ました」
「また、犠牲を出そうといふのか、エノクとエリヤのよう」

エノク、エリヤ。

その名を聞いたのは初めてではない。あの戦争のとき、ルシファと相対した美の天使ミカエルが同じセリフを口にした。
いつたい誰のことなんだろう。

「ルーク 最期はあなたが選んでください」

「ルシファ、いつか教えてくれるの？ おれと契約した理由……」
先祖様が、おれとアレイさんに託そうとしていたこと

見上げると、ルシファは相変わらず悲しげな瞳で微笑むだけだった。

すると田の前の少年、コクマが痺れを切らしたように言った。

「ラック＝グリフィス、お前をセフィロト国軍の名の下に拘束するよ。抵抗は許さないからね」

「いやだ、って言つたら？」

「そりや、力ずくで連れて行くさ」

「わかった。んじゃおれは全力で抵抗する」

捕まるわけにはいかない。退くわけにもいかない。
だつて自分の後ろには大切なものがたくさんある。
ずつと見守つてくれたダイアナさんと盾になつて怪我をした
リッド。そして、生を受けたばかりの子供たち。

ねえちゃんがずつとずつと自分の事を守つてくれていたみたいに、
今度はきっと自分が子供たちを守る番だ。

今なら分かる気がする。強かつたねえちゃん。だれにも負けない、揺らがない絶対的信念を持ち、いつも優しく包み込んで守つてくれていたねえちゃん。その強さの理由が。

田の前の相手が誰であろうと、負ける気がしなかった。

全身に加護が滾る。

「だつておれはもう、母親、なんだから
ひどく不思議な感情だった。」

これまで抱いてきた『守りたい』という気持ちとは少し違つ、もつと暖かくて大きな感情……ヒトはこれをなんと呼ぶのだろう？

拳を握り、古体術の構えをとる。

「娘 世界の理「ことわり」を知り それでもなお 抗うか

「クマの背後に浮かぶ知恵の天使ラジエルが威圧的な声で言い放つ。

「世界のことわりなんて知らない。ルシファがおれに何を求めるのかも知らない。でも……おれの大事なヒト達を傷つけさせたりなんてしない」

武器を持たず圧倒的不利な状況だといつて、不思議なほど心は落ち着いていた。

「んじや……少し痛いぜ、見る？」

可愛らしく微笑んだコクマの殺氣に、一瞬背筋に冷たいものが這つた。

コクマが天に向かつて手を伸ばす。

何が来る？

緊張で満たされた空間が支配する。懐かしい、戦いの空氣だった。

少年の小さな唇が聞き慣れない言葉をつづる。

「A - R - C - E - S - S - O - T - O - N - I - T - R - U - S

その瞬間、眩いまでの雷撃が青天から降り注いだきた。

「つ？！」

なんとその雷撃は天に手を翳かざした少年を直撃した。

放たれた光に思わず視界を手で覆う。

「先代のコクマは、この力が使えずにレメゲトンにあつさりやられたらしいね。でも、今回はそうはいかないよ」

恐る恐る手を下ろした。

少年の周囲をぱちぱちと爆ぜる音のする光の帯が取り巻いている。その影響か、微かに翠がかつた銀髪が風もないのにふわりと浮いた。

「手を前に ルーク」

ふいにルシファの声がした。

言われるがまま手を前に差し出す。

すると、両手から漆黒の霧が漏れ出し、銀の光を帯びながら見る
みるうちに形作つていった。

「……これ」

「あなたが 最も欲する 武器でしよう」

両手に収束したのは、小太刀より少し短く、短剣より少し長い直
刃で片刃の剣。両手のうちに現れたそれを何の躊躇もなく手におさ
めた。

その一本の剣は手に吸い付くほどよく馴染んだ。

背にふわりと翼が広がる感覚があった。

「ありがとう、ルシファ」

これで戦える。

足が地面から離れた。空に浮くのは懐かしい、しかしそく馴れた
感覚だった。

「ルシファの力は、なに?」

フラウロスさんが炎を扱うように。アガレスさんが地震を起こす
ように、ハルファスが風を支配するように。

ルシファも特殊な力を持つだろう、と思つた。

「私の力は 創造です」

「……そうぞう?」

聞き直したが、その瞬間に殺氣を感じて思わずその場から飛び退
る。

気がつけば「クマの掌から電撃が放たれており、その力は凄まじ
い音とともに自分の立っていた足元を焦がしていた。

そのまま空に飛び上り、上空からコクマを狙つ。

「グラシャ・ラボラスや メタトロンが有する 滅びと 対極に位置する力 それが私の 創造」

「物を消すんじゃなくて、生み出す力ってことだね」

リュシフェルはかつて魔界を建造したという。

それはおそらくこの力によってなされたのだろう。

「私の力は 異端です 滅びを待たずして 再生を促す 諸刃の剣」

深く悲しいテノール、墮天使の声は聴覚とは違う何かの感覚で知覚し、全身、隅々まで沁み渡つた。

「だから 必要なのです 滅びが 彼の力が」

「……やっぱりよく分からぬよ、ルシファ」

首を横に振り、両手剣を構えた。

見上げて爆ぜる電撃を放つてきたコクマの攻撃の軌道を完全に読みきつてすれすれでかわし、両手の剣を同時にコクマの頭上から振り下ろした。

が、その瞬間。

ばちん、と大きな音がして自分は後ろ向きに吹っ飛んだ。
慌てて体勢を立て直し、地面上に着地する。

「痛う……」

剣がコクマの両手に触れようとした刹那、全身を何かに貫かれたような感覚が走つたのだ。

柄を握つていた両手がジンジンとしびれてい。

「ちえつ、はずしちやつた」

コクマが唇を尖らせている。

何だ、これは……触ると雷撃が走るのか？！

「次は外さないから！」

にこりと笑つたコクマに動搖を悟られぬよう、唇の端をあげた。

考える。

コクマに触れれば電撃が走る。それは刃を介しても同じこと。だとすれば、どうしたらいい？

「この剣……いくつでも作れるよね？」

ルシファの力が『創造』であるならば容易いことだらう。そうでなくとも、滅びの力を持つラースも幻想の刃を手にしていたし、おそらくマルコシアスさんがいつも手にしているのもそういうだらう。

返答はなかつたが、確信していた。

誰に教わったわけでもないのに加護を受けて空を飛べた時も、フランコスさんの炎を初めて使った時もそうだった。理屈ではない感覚が力の使い方を教えてくれる。

敵に触れられないなら、いつたゞひやつて戦つたらいい？

答えは簡単だ。

「いぐぞ！」

両手の剣をぎゅっと握りしめた。

背の翼が広がる。

足が地面から離れて、重力の糸を引きひきつた解放感が全身を満たす。

コクマは再び両手に電撃の威力を込めた。つられるようにして背後に浮かぶラジエルから闘気が漏れ出し、全身の震えを誘発する。2年前、戦場で戦つていた時なら互角に戦うのは容易かつたかもしれない。

しかし、自分には2年間という空白期間^{フランク}があった。幸せな、穏やかで平和な生活を送つていた2年間。その時間は確実に自分の実力を削いでいた。

ラースには『また弱くなつたネ、ルーク』なんて言われてしまつかもしない。

「戦争の時のおれと同じだと思つなんよー」

戦う力を代償として手に入れたものもある それは、過去の記憶。そして守るべき存在。

先ほどと同じように両手を大きく振り上げ、コクマの頭上に急降下する。

「もう、学習しないな。僕には触れないって分からなかつたの？」
それは承知の上だ。

目の前に雷撃が迫る。

その瞬間に、翼を大きく広げ、両手を振り下ろす。
短剣が自分の手を離れ、まっすぐに落下していった。

「？！」

コクマの目が大きく開かれる。

飛んできた刃に慌て、凄まじい轟音を挙げて短剣を雷で撃墜した。
そんな事をしている間に自分の手の中には既に新しい短剣が握ら
れている。

「なつ……！」

空中から次々と剣の雨を降らす。

コクマを防戦一方追い込み、攻撃の隙を狙う。

体が鈍つていて以前のように速度を生かして懷に飛び込むのが危
険すぎるため、どうしてもそうせざるを得なかつた。

どうにか隙をついてコクマを気絶させなくてはいけない。

しかし、加護を受けたセフィラの強さは過去の自分が身をもつて
知つている。

雷撃で弾かれた短剣は黒い霧と化して空気_ADDRESS_溶けていく。

が、しかし、量でごり押しするこの作戦は、確実にコクマの集中
力を削いでいった。以下にセフィラと言えど、相手は1-0を少し過
ぎたばかりの少年だ。それも、実戦経験はほとんどないに違いない。

「くつそおー！」

大量の刃を雷撃でさばきながら、表情がだんだんと険しくなつて
いくのが分かつた。

そろそろ、いいか？

一気に数本の短剣を飛ばした後、両手に意識を集中する。

黒い霧が形作つたのは、頑丈な鉄格子。鳥を飼う籠のよつに半球

状をした檻だつた。

すかさずその檻を地面に向かつて突き落す。

「しまつ……！」

鈍い音がして地面に鉄格子が突き刺さつた。
短剣に氣を取っていたコクマは、足を動かす間もなく鉄格子のなかに囚われた。

もちろん、間髪入れず地面に降り立ち、掌に力を集中させる。自分の全身を取り巻いた漆黒の霧は手の中で集約し、漆黒の重力球と化した。

「くらえつ！」

すぐに雷撃で鉄格子を破壊しようと試みているが、そんな暇を与えるはずもない。

気合いと共に投げつけた漆黒の重力球は、鉄格子の合間を縫つて確実にコクマの急所を捕えた。

体を一つに折つて後ろ向きに飛び、鉄格子に叩きつけられたコクマ。

ルシファの力で作り出した檻と雷撃が反発し、凄まじい破裂音を響かせた。

「ぐつ……ふ……」

そして、喉の奥から絞り出すような声を上げたコクマは、そのまま地面に倒れ伏した。

背後のラジエルが消失したのを確認し、鉄格子を解除した。
コクマの翠銀の髪が土の地面に広がつていた。

「ルシファ」

名を呼ぶと、6枚翼の堕天使が目の前に降りてくる。

「このヒトを氣絶させたまま拘束する事つてできる？」

「加護を奪えば 永く 意識を失います」

「……」「……

加護を奪う。その言葉で心臓が跳ね上がり、銀髪の双子がフラッシュバックした……降りしきる雨の中、加護を失った彼らは、いつたいどうなったんだろう？

ゆつくりとコクマの神官服に手を伸ばす。

固く閉じられた瞼は、そう簡単に開きそうになかった。

セフィラの印を探そうと服に手をかけた時、喉元に黒い刺青のようなものがある事に気づいた。セフィラの加護印だ。

「これ、消せる？」

ルシファは返事をしなかった。

しかし、ふわりと地面に降りてきて、その白く細い指をコクマの喉元に向けた。

「いいのですか？ ルーク」

「……」

「貴方に 迷いが見えます」

答えられずに唇を噛んだ。

分かつていて。あの時、あの雨の中銀髪のヒトたちから加護を引き剥がした時に自分が心に負つた傷は深い。重く膿を溜めた治らない傷。

今でも怖いのだ。加護を失わせることだが。

「少しだけ、待つて」

そう言つてルシファとコクマに背を向ける。

「では 眠らせましょう 遠く永い 深淵の眠りに」

そうルシファの声が響くと、銀の光があふれた。同時に額がひどく熱くなる。

振り向いた時にはすでにルシファの姿はなく、地面に伏したコクマだけが取り残されていた。

額の熱さも消え、ただその場に沈黙が訪れた。

SECT・16 迷い（後書き）

何話か……とこいつつ今回は一話分のみ更新です。

2・3月は理不尽な多忙により、これまでのよつて毎日更新は難しくなりました。

ここからはのんびり更新になると思ってます。

メッセージくださった方々、ありがとうございますー本当に励みになります（^—^。）

でも、夜通し読むのは体に悪いので控えてください（笑）

ほんの一言でも感想などいただけると勝手に喜びます。

まだまだ若輩者ですが、これからもよろしくお願いします。

SECT・17 怒り（前書き）

実は「LOST COIN」シリーズのアクセス数が、いつしか10万を突破していました……ありがとうございます!!

記念、と言つてはなんですが外伝的に誰かのストーリーを書こうと思います。

今のところライディーンか、敵国ではゲブラあたりを考えているのですが……もし要望あればメッセージや感想でどうぞ。

もし反応がなければ勝手に決めて勝手に書きます（笑）

実はこれからヨーロッパ旅行に出るので、たぶん帰つてきた3月終わり頃に書き始めると思いますが（遅つ！）。

それに伴つて連載もいつたんお休みします。（休んでばっかりだな）こんな拙い話ですが多くの人に読んでいただけて本当にうれしいです。

幕間が終わつてから少しお休みをいただいて最初の方を推敲しようと思います。

そこから第一幕……ほんとにこの話完結まで書けるかな……（汗

ほんの少しでも感想いただると非常に励みになります。
これからも、よろしくお願ひします。

0
8
·
3
·
4

早
村
友
裕

「ラック！」

女性の声に振り向くと、ダイアナさんが泣きそうな顔をしてこちらに駆け寄ってきた。

「……ダイアナさん」

柄にもなく戸惑つてしまつたのは、ずっと一緒にいたにもかかわらず懐かしい再会を交わしたかのような感覚に捕らわれたからだ。戦場で命を落としかけた。しかし、ルシファに救われ、この街の片隅で偽の記憶を埋め込まれた状態のまま生活していた。2年間母親だと信じていた金色の影は、自分を育ててくれたレメゲトンのねえちゃんだった。

ねえちゃんの死によつて刻まれた傷はどこかフィルターがかかつたように薄らいでいた。

これは時を経たことによるものなのだろうか。

ダイアナさんに向かつて微笑むと、彼女は大きな紫の瞳から大粒の涙を溢れさせた。

「ああ……ラック。本当に貴方なのね？」

「うん。おれは、グレイシャー＝ロータスで、ラック＝グリフィスだ……ねえちゃんがくれた名前だよ」

まだ心のどこかが麻痺しているようだつた。

過去を知つたというのに、実感がない。一枚膜を挟んだ向こう側で起きている、夢の中の出来事のような感覚だつた。

「リッド君も無事よ。いま、中で寝かせているわ」

「ダイアナさんが運んだの？！」

「いいえ、違うわ」

はつと家の方向を見ると、金髪の美丈夫が佇んでいた。

「クラウドさん」

記憶を失くした自分達を、それでも見守つてくれたヒトたち。

視界が滲んだ。

クラウドさんはいつものように柔らかな微笑みで手を差しのべた。

「おかえり……ラック」

「…………ただいま」

長い長い旅から帰つて来たかのようだ。

溢れてくる涙を拭う事もなく、その場所でただ涙を流し続けた。

改めて赤子と対面すると、全身からどうしようもない感情があふれ出してきた。

「…………ああ」

感嘆のため息となつて具現化したそれは、空気に蕩けて消えていつた。

が、感情は後から後から湧いてくる。

愛しい。ただ、愛しい。この命を賭したとしても、害を加える何者からも守り抜いてみせる。この小さな命を傷つけることは許されない。

ルシファの加護を受けてから全身の倦怠感も下腹部の痛みも、すべてが消え去つていたが。

小さな小さな手を互いに握り締め、純白の産着に包まれている姿は胸を締め付けた。

二人の赤子を抱き上げ、優しく抱きしめた。

「絶対に……守るからね」

口に出して初めて、自覚した。

自分は、母親になつたのだと。

「でも、今は少しだけ待つって」

一つの赤子をダイアナさんに渡して、もう一度氣を引き締めた。

「行くのね」

「うん。アレイさんを、助けに行かなくちゃ」

体の調子はすこぶる良かつた。とても昨日出産を終えたとは思え

ないほどに。

その様子を見て、クラウドさんは少し待つていて、と言つてから部屋の床板をあげた。

「…」

こんなところに収納庫があつたなんて。
しばらくその中を探つていたクラウドさんは、一本の剣を取り出した。

「持つてこくといい。ラック……君の、君だけの武器だ」

「これ……」

嫌というほどに見覚えのあるショートソード。記された悪魔紋章はサブノックのものだ。

「いつか必要になるかもしれないと思つておいたんだ。そんな日が来ないことを願つてはいたのだがね」

悲しそうに微笑むクラウドさんからショートソードを受け取つた。
「それから、これも」

続いて出でてきたのは、美しい細工の為された長剣。自分の手には余る大きさだが、彼の手には馴染むはずの武器だった。

彼の長剣も抱いて、歯をきゅっと引き結ぶ。

「ありがとう、ダイアナさん、クラウドさん。子供たちを……お願
い」

「大丈夫。安心して」

ダイアナさんの微笑みにぺこり、と頭を下げ、自分は部屋を飛び出した。

彼のもとへ。
愛しい、彼のもとへ。

街へと続く道は静まり返つていた。

聖騎士団はすでに撤収したのだろうか？ 時折、扉が破壊されて

いる家も見受けられ、さらに怒りが増した。

「クマの言葉を信じるなら、今アレイさんのもとにいるのはケテ

ルだ。

天界の長メタトロンを召喚し、滅びの力を操る ねえちゃんを、殺した男。

「許さない」

この上、アレイさんまで手に掛けよつなんて。さらに速度を上げて街の中心へ向かった。

街にはさすがにセフィロトの騎士が見受けられる。

おそらく悪魔崇拜の証拠が見つかり拘束されたと思われる街のヒトたちが縄に結わえられて壁にもたれていた。

「グレイス！」

自分の姿に気づいた鍛冶屋のリストさんが血相を変える。

「いまロータスさんが、セフィロトのお偉いさんに捕まって……」「どこにいるか分かる？！」

「おそらくステラの宿屋あたりに連れて行かれたと思うんだが」リストさんが言つた瞬間、聖騎士が鞘に入ったままの剣でリストさんの腹部を強くついた。

「余計な事をしゃべるな」

ぐえ、とつぶれた声を出してぐつたりとなつたリストさんを見て、限界がきた。

「……許さないっ！」

両腰にさしていたショートソードを抜き放つ。

この瞬間、自分はセフィロト軍から敵と見なされた。

一番近くにいた騎士が剣を抜く前に叫ぶ。

「ルシファア！」

すさまじい力の奔流が全身を駆け抜け、高揚感が精神を支配する。加護を受けた自分に、生身の騎士の動きは遅すぎる。

一瞬で背後に回つて甲冑の隙間に殴打をたたき込んだ。

声もなく倒れた同僚を見て、聖騎士たちが集まりだした。

着地もせずに空中で向きを変え、次の標的に向かう。

「どけつ！ ケテルに会わせろ！」

瞬く間に自分の足元には数人の騎士たちが転がっていた。

「おれは……ラック＝グリフィスだ！ どこだつ、ケテル……」

腹の底から叫んだとき、ずずず、と地鳴りのような音を立てて地面が揺れた。

いつたい何だ？！

心拍数が一気に上昇した。

「何の騒ぎだ！」

そこへ、凜とした女性の声がその場に響いた。

聖騎士たちははつとしたように膝をつく。

どうやらこの声の主は相当な階級の持ち主らしい。

「おや、お前は……」

金の紋様が入った純白の鎧と銀の脛当（ひざあわせ）から、聖騎士団の一員であることが分かる。しかしながら、赤茶色のふわふわした髪を高い位置で縛っているのと、気の強そうな銀灰色（シルバーグレイ）の瞳には見覚えがある。「この者がラック＝グリフィスを名乗り、突如聖騎士団を襲つたのです！」

「ふふ、黒髪に黒き瞳、空を舞う両手剣の使い手 確かに、この顔はラック＝グリフィスだ」

「……思い出した。宣戦布告の時にグリモワールに来たヒトだね」

「覚えていたのか。それは光榮だ」

腰に手を当て、自信たっぷりの笑みを浮かべる姿も変わってない。あの日、戦争がはじまった日に見た彼女そのものだ。

「アレイさんはどこ？」

「アレイスター＝クロウリーか？ 彼なら今頃ケテル様に半殺しにされているかもな」

「つ！」

「ケテル様はずいぶんとお前たち一人に恨みがあるようだ。手加減

などしないだろ？よ。おそらく、先ほどの轟音もケテル様の……」
気がつけば一瞬で間合いを詰めていた。

喉元にショートソードの切っ先をつきつける。

「早く連れて行つて。おれは……もうさつきからキレてるんだ」
そう言つと、赤茶髪の女性は唇に笑みを湛えたまま頬を引きつら
せた。

SELECT · 18 アレイセラ（前書き）

旅行から帰つてきました。

これからまた更新を再開します。

とほこえ、これまでのよつて毎日ではなく、3日間一回くらいこなるかも？

自分のスペースがいまいちつかめないので、次の更新を予告することができません……（汗）

ただ、この章はあと少しで山場を過ぎるので、もつとしだけ気長にお付き合ってください。

さつきからずつと左手が熱い。さつと、自分の怒りに反応して。左手の熱さに震えそうになるのを抑えて剣を突きつけ、赤茶髪の女騎士を促して周囲の騎士たちを牽制する。

右手でアレイさんの剣を抱えているためにあまり派手に動けない。剣を突き付けられた彼女はすぐに落ち着き、静かに命令を下した。「うるたえるな。全員その場で待機せよ」

「ですがフロリス様」

「案ずるな。すぐに戻る！」

上官に剣を突き付けた反逆者を捕えようとした騎士は、その上官の一喝で口を閉ざした。

銀の甲冑に身を包み、白衣マントをはためかせた幾人もの騎士たちが歯噛みしながら自分とこの女性騎士を見送っていく。左右の騎士たちが行動を起こさぬよう、起にしても対処できるよう気を張つた。

女性騎士はメインストリートを外れ、裏の飲み屋街に向かつて歩を進めていく。

ルシファの加護を解いて隣を歩く自分に、その女性騎士はふと訪ねてきた。

「コクマ様はどいつされた。あの方があ前の捕獲に派遣されたはずだ」「……おかげで目が覚めたよ。おれはこの2年間ずっと、夢の中で暮らしてたのに」

夫と共に、穏やかな時の中で。

「そうか、アレイスター＝クロウリーも記憶を失っているようだつたからな。お前も同じように何もかもを忘れて暮らしていたらしくな」

アレイさん。

また怒りがこみ上げそうになつて左手が震える

滅びの悪魔と

契約した証。

彼の方にはケテルがいると先ほどの少年、コクマが言っていた。彼も自分と同じように何もかもを忘れた状態で、穏やかに暮らしていた。

「……どうして、邪魔するの？」

ぱろりとそんな疑問が口から零れおちた。

「おれはこのまま静かに暮らしたいだけなのに、何で放つておいてくれないの？ いつだつておまえたちはそうだよ」

戦争の時だつて、戦を仕掛けたのはセフィロト国。ゼデキヤ王はそんなこと一度だつて望んでいなかつた。

今回も、「クマが現れなければ、セフィロト軍が悪魔崇拜に対し規制を敷かなければこの幸せな時の流れの中で一生を終えたはずだつた。

「これ以上おれたちの邪魔、しないでよ……！」

今だつてウォルが、アレイさんがケテルに拘束されている。記憶をなくして悪魔の加護だつて受けていない彼がメタトロンを召喚するセフィラに勝てるわけがない。リッドだつておれをかばつて大怪我をした。

何の抵抗力も持たない街のヒトたちを武力で抑えつけ、傷つけた。

コルサナイ

自分の中で怒りの感情が増大していくのがわかる。

ショートソードを持つ左手が震えている。

「すべてはケテル様の御意志だ。私たちはただの駒にすぎない」

そう言つた女性の声は凜としていて一分の隙もなかつた。心の底からケテルを信じて疑わないのだろう。銀灰色の瞳に迷いは見られなかつた。

そのことに疑問を抱かず、誇りに思うわけでもない。

この女性騎士にとつてそれは『当たり前』のことなのだ。

「……そう」

これ以上何を言つても無駄なんだろうか。

きっと2年前の『ラック』の人格ならば何が何でも改心させよう
と躍起になつて説いたかもしれない。

でも、自分は今、黄金獅子の末裔で、ラックで、そしてグレイス
だ。それは、ひどく不思議な感覺だった。まだ、夢の中にいるよう
だ。いくつもの感覺がせめき合いながら自分の中でひしめいている。
どうしたらしいんだろう。

助けて。

「アレイさん……」

いつだつて導いてくれた強い瞳。紫水晶の見つめる先を、自分は
いつだつて追いかけていた。

記憶を取り戻した今ですらも。

だから、今度は自分が彼を守る番。

戦の悪魔であるマルコシアスさんが傷を癒し、すべての記憶を塗
り替えた。それは、きっと彼を大切に思つていたから。多くの責と
務めから解放したかつたから。平和というものを知つてほしかつた
から。

だから、自分も全力で彼を守りたい。

「ここだ」

ずっと剣を突き付けていた女性騎士が指したのは、初めて会つた
時、紫の瞳の彼が働いていた酒場だった。

次の瞬間には、凄まじい破裂音と破壊音が店の中から飛び出して
きた。

「つー！」

やばい。

彼は今、丸腰のはずだ。

右腕で抱えた長剣をもう一度ぎゅっと握りしめる。

ずっと突きつけていたショートソードの柄で、女性騎士の首筋に
殴打をたたき込む。

声もなく倒れた彼女に目をくれる事もなく、店に飛び込んだ。

アメジスト

そこで目に入った光景は　自分の視力がなければただ唐突に壁や天井が破壊されていつているようにしか見えなかつただろう。その実、この場ではケテルと黒髪の騎士が天地関係なく凄まじい破壊力の剣を振りかざして飛び回つてているのだ。眩い閃光を放つ光の矢、それをぎりぎりでよけながら攻撃の間合いをはかる漆黒の剣。背には大きな純白の翼を湛え黒髪から短い角を生やした悪魔騎士は、壁を蹴り天井を蹴り、徐々に敵へと近づいている。

対するケテルはこの距離と速度で大きな力を使う事も出来ず、不可思議な動きで対応している。

メタトロンの加護を受けているようだが、どこかおかしい。

「右腕……」

そうだ。ラースが……自分が消滅させた、右腕がないせいでもうまく動けないんだ。そのせいでメタトロンの力もうまく制御できていない。

「倒すなら、今だ。

あの戦争の時、ねえちゃんを殺した圧倒的な力は、もはやこのケテルにはない！

そう判断して、唇を引き結んだ。

彼が悪魔の力を使つていてることには、全く違和感も持たず。

「アレイさんっ！」

腹の底から叫んだ名に、^{アメジスト}紫水晶が一瞬こちらに向けられる。

驚きを隠せない表情を無視して、右手に抱えていた長剣を投げた。まっすぐに飛んだそれは、すぐに彼の手に収まつた。

息をのんで見守る中、『アレイさん』は狭い店の中でいつたんケテルと距離を置いて息をつき、長剣を左手で構えた。背に純白の翼を湛えた、黒髪の悪魔騎士　　その姿はまるで一枚の絵画のよう目に奥に強烈に焼きついた。

実は、さつきの戦闘を見ていて、もつひとつ気になつたことがあつた。

右腕がないだけでは説明のつかないケテルの戦闘能力低下。

「……左」

ぽつり、と口にした言葉にケテルが反応した。

やはり、そうだ。

彼が天使に受けた加護印は、おそらく左腕にある。右腕の無い状態で、加護印のある左腕を庇いながら戦闘をするのは容易なことではない。それが、敵の行動を制限している大きな要因であることは間違いないだろう。

それを聞いたアレイさんは静かに狙いを定めた。

「また貴方ですか、ラック＝グリフィス！ 私の腕を奪つた魔魔！」

ケテルのけたたましい声が荒れた店内に響く。

「余所見をするな、ケテル。お前の相手は俺だ」

アレイさんの静かな声で、その場に緊張が張り詰めた。なぜ、この戦場の空気がこれほど懐かしく感じてしまうのだろう。自分は、戦いなど望んではいないのに。ずっと平穏に暮らしたいと思っていたはずなのに！

それでも、この戦いから視線を逸らすことはならなかつた。

アレイさんの剣を黒い霧が包みこむ いや、漆黒ではない。暗い店内だから分かりづらいが、あれは非常に濃い紅だ。おそらくは、あの墮天の魔魔の瞳と同じ炎妖玉色。

魔魔の加護を受けたあの長剣は、ケテルの光の矢を弾く力を得た。ルシファを召喚していない自分にできるのは、足手纏いにならぬよつここの場を離れることだけだ。

後ろ髪惹かれる気持ちを振り切つて店を飛び出した。

店の外では、倒れた女性騎士をセフィロト軍の兵士たちが介抱しているところだった。店に入っていた間にほぼすべての騎士たちが集結したに違いない。すぐに十数名の騎士が自分を取り囲み、各自の剣を突き付けた。

「わあ」

どうしようもなくひょい、と肩をすくめる。

陽光が剣に反射し、思わず目を細めた。

「動くな！ ラック＝グリフィス！」

「……」

ルシファを召喚する？ いや、まだ早い。ショートソードも手のうちに在る今、自分の力でできるところまで何とかしよう。そう決心したその時、背後で凄まじい破裂音がした。

心臓が飛び跳ねる。

だいじょうぶ、だいじょうぶ。アレイさんは強いんだから。

「だつて、ずっと傍にいてくれるって言ったもん」

周囲の騎士には聞こえないようにぼそりと呟いた。

彼は、何度も何度も繰り返すようにそう語ってくれた

夜にも、戦場でも、記憶をなくしたこの街でも。

その時、何かが引っ掛けた。

「……あれ？」

よく考えれば、『ウォル』は悪魔の召喚なんてできないはずだ。

だつて『グレイス』と同じで、過去のレメゲトン時代の記憶はなかつたはずだから。

なのに、さつきあのヒトはマルコシアスさんを使役してた。純白の翼と短い角がその証だ。

「あれれ？」

おかしいぞ？ んじゃあ、あの場にいるのはいったい誰？

「フロリス様っ！」

鋭い騎士の声がしたが、どうでもよかつた。

もしかして。もしかすると。

たつた一人で永劫を生きると思っていた
やつてくれたな、レメゲトン。いや、もうお前はレメゲトンでは
なかつたか？

起き上つた女性騎士の声がする。

でも、それもどっちでもいい。

自分に向けられた十数本の切つ先のことだつて今はどうだつてい
い。

生を受けたばかりの子供が育つていく様を、老いていく様を一
人で見ると思つていた

「ケテル様もここにいる今、お前に勝ち目はないぞ、ラック＝グリ
フィス！」

「……アレイさん」

でも、もしかすると自分は一人じゃないのかもしれない

震えるほどの歓喜が全身を貫いた。

店の入り口を食い入るように見つめた そこから、ゆっくりと
歩んでくる人影を。

「……遅かつたな」

深いバリトンの声。毎日毎日聞いていた、でも何故だかとても懐
かしい声。

「くそガキ」

左手の長剣を鞘にしまい、黒髪の男性がゆっくりと姿を現した。

声が出ない。たくさん話したいこと、あるはずなのに。たくさん
聞きたいこと、あるはずなのに。

相変わらず眉間に皺が寄つていて、ひどく不機嫌そうな顔にな
つていて。服は割かれて胸のあたりが露わになつていて。そのせい
で上半身に刻まれた多くの傷跡が見え隠れしている。

背の翼と黒髪から飛び出していた短い角は消えていた。

その姿を見た女性騎士は大きく目を見開いた。

「なつ！ 貴様……ケテル様は？！」

「知らん。もう既にケテルではない男なら店の中に転がしてあるがな」

その言葉で、女性騎士と何人かの騎士たちが店の中に駆け込んでいった。

無論十数本の剣はこちらに向けられたままだ。紫の瞳の彼は、その包囲にも臆することなくこちらに近づいてきた。

そして、すっと耳元に唇を近付けて小さな声で囁いた。

「一度に片づける。リュシフェルを召喚しろ。全員の記憶を改ざんするぞ」

「……分かつた」

隣に彼がいる。

それだけで、どんな事も出来そうな気がしていた。

左手の震えは完全に止まっていた。

「ルシファ！」

「マルコシアス！」

同時に叫んだ声で、この場に光の嵐が吹き荒れる。

柔らかな銀の光と澄んだ濃い紅の光が交差するように、美しい螺旋の軌跡を描いた。

その光が徐々に形作るようにして、自分の頭上には6枚の翼を湛えたリュシフェルが、紫の瞳の彼の頭上には純白の翼を一対持つ褐色の肌の戦士が現れる。

「久しいな 幼き娘」

「……もう幼くなんてないよ」

笑いながら首を振ると、マルコシアスさんも笑い返してくれた。八重歯が覗いて、それが少し幼く見せたのだが……その顔が何か引っかかった。

何だろう。同じ顔を、どこかで見た気がする。

「如何した 幼き娘」

「ううん、何でもない」

左手が、熱い。何かに反応して震えている。先ほど震えは止まつたはずだったのに。

震えを止めるために左手の拳をぎゅっと握りしめて、背後の壮麗な墮天使を見上げた。

「ルシファ、お願ひ。力を貸して！」

「ルーク 貴方が望むままに」

銀の墮天使が両腕を広げる。

周囲を取り巻く騎士たちが召喚された悪魔に驚いて陣形を一歩崩す。

「すべての記憶を白紙に。このヒトたちが、この街に来たといいから」

「では 先程の ラジエルの少年にも 同じ様に 施しましょう

「……ありがとう」

おれは、天使の加護印を奪う事を躊躇つてしまつた。知恵の天使ラジエルの加護を受けたあの少年を殺すことも、加護を奪う事も出来ないのなら。

せめて何もかも忘れてもらおう。

銀の光が溢れる。

それを支えるように濃い紅の光が走り出す。

どこまでも、どこまでも。

その光は、いつしか街全体を包み込んでいた。

いつたいどれほどの時間が流れただろうか。光は収束し、街の中には穏やかな風が戻ってきた。自分たちの周囲にはまるで戦場の屍のように騎士たちが倒れ伏していた。

もちろん、すべてが元に戻つたわけではない。

先ほどまでケテルとの戦いを繰り広げていた店は倒れそうに傾いているし、セフィロト国の聖騎士団に踏み荒らされた道は『ゴボロだ。

でも……

そつと、右手で隣のヒトの手を握った。

「……アレイさん、ですか？」

俯いたまま問う。

彼がじつと見下ろしている視線が感じられたが、どうにも顔は合わせられなかつた。

「普段敬語など使わんくせに、頭でも打つたかくそガキ

「ガキつて言うなっ！」

懐かしい台詞を叫びながら、心の中を渦巻く歡喜を止められなかつた。

「うわあ……どうしよう

顔があげられない。きっと今、自分の顔は真っ赤なはずだ。

だつて、自分は今、『ルーク』で『ラック』で『グレイス』だか

ら。

3人分の記憶と感情がじつちやになつてゐる。

「……」

どうやら彼も、かける言葉を選びすぎてそのまま黙り込んでしまつたようだ。

しばらく手をつないだまま一人で沈黙した。

「顔、あげる。くそガキ」

「……無理だよっ」

本当に無理だ。心臓は今にも飛び出しそうなくらいにドキドキいつてゐし、顔は燃えるみたいに熱い。繋いだ手だつて今にも震えだしそうだ。

「いいから、こつちを見ろ」

「やだつたらやだつ！」

いろんな記憶が頭の中を駆け巡つて、自分で沈黙している。

初めて会つてから、一緒にねえちゃんを探しに行つた。戦場で肩を並べて戦つた。いつも迷つている自分を導いて、まっすぐに未来を指示してくれた。

それから、もう一度出会いつて、もう一度好きになつて、それから

気がついたら田の前にはだけた彼の胸があつて、背に温かい手の感触があつた。

それを見たら、また心臓が爆発した。だつて、子供が出来たつて言つ事は、それなりの行為を経てきたわけで。

いろんなことを思い出して泣きそくながらに恥ずかしくなつた。

「だめー！ 恥ずかしくて死ぬつ！」

ぽかぽかと彼の胸板を拳で叩いた。

すると、彼はふつ、とため息をついた。

「阿呆か、お前は」

「うええん……だつてさあ……」

「やめる。俺だつて……」

なぜか彼はそこで口を噤んだ。

あれ、おかしいな。

思わず顔をあげると、ヒトには同じように真つ赤になつた愛しいヒトの顔が見えた。

ああ、なんだ。恥ずかしいのは一緒にだつたんだ。

「ふふ」

そう思つたら、なんだかほつとした。

思い切つて、懐かしい、愛しいヒトの胸に飛び込んだ。

彼は逞しいから、自分を受け止めてもぜんぜん平氣そうだつた。

「大好きだ。アレイさんも、ウォルも……どっちも、好き」

心のままに呴いた 世界で一番安心できる場所で、静かなバーリトンを聞きながら。

幸せだつた。幸せすぎてもう何も考えられないくらい。

まるでこいつかの戦場で心通じ合つた時のようだ。

「この穏やかな時が一瞬の夢だという事も、この先に待ち構えている別離も困難も、すべて頭の片隅では分かつていた。だつてもう、自分の体はとても普通の人間とは言い難かったから。左手の悪魔。魔界の王ルシファの刻印。時を止めた肉体。そして、この時は知らないが、既に自分はもう一つの枷も背負つていた。何からも逃れられなくなつていて。ルシファが、マルコシアスさんが懸念したようだ。

まるで薦でゆっくりと絡め取るよつとして運命から逃げられなくなつていくのだ。

まだそれを知らない自分は、ただただこのイジワルで、でも底抜けに優しい紫の瞳を持つこのヒトの腕の中で夢を見ていたんだ。

アレイさんは嫌がつたが、手をつないだままゆっくじと家路についた。

「ねえ」

「……何だ」

「あのね、子供ね、生まれたの。一人。双子だったの。男の子と、女の子」

「……そうか」

「すつごい可愛いんだよ。帰つたらすぐ、抱いてあげて。おれ、ダ
イアナさんとクラウドさんに任せて放り出してきちゃつたから……
泣いてるかもしれない」

「お前、体は大丈夫なのか?」

「うん、平気。ルシファアが治してくれたから」
ぱつり、ぱつりと。

ゆつくじと言葉を紡いでいった。

とても幸せなのに、どうしても拭えない別れの予感に、心は重く

沈んでいった。

「アレイさんも、契約、したの?」

「……ああ」

アレイさんはそう言つて、裂かれた服の隙間から心臓の真上の傷
を撫でた。

そうすると、黒々とした悪魔紋章が一瞬だけ姿を見せた マル
コシアスさんの紋章だった。

「お前も契約、したんだな」

「うん。もう……年、とらないんだって。ずっとこの姿のまま、生
きてくんだって」

あの時は必死で感じなかつた恐怖が、今になつて襲つてきた。

「……やだね。子供が年取つてさ、死んじゃつて、その子供が年取

つて死んじゃつてもまだ生きてるんだつて。マルコシアスさんと、同じだね」

ずっとクロウリー家に仕え、その子孫を見守つてきた魔界の剣士。彼はいつたいどんないで永劫の時を過ごしてきただろう。

「怖いよ、アレイさん。そんな永い時を、いつたいどうやつて過ごしたらしいんだろう」

ああ、やっぱりだ。自分は、このヒートを前にすると弱さをすべてさらけ出してしまつ。こつだつて強く在りたいと願つてこらとこらの上に。

何故こんなことになつてしまつたんだろう。

ずっと安寧の中、穏やかに一生を終える事が出来れば……それ以上のことなど望んでいなかつたのに。平和以外の何物も望んでなどいないのに。欲したことなどなかつたのに。

世界はどうしても自分達を戦闘の直中へと放り込みたいよつだ。

「もしさあ、見守る事も許されなかつたら、どうしよう……」

だつて自分たちは見つかつてしまつた。セフィロト国に。天使たちに。

もうこの街にとどまる事は出来ない。

そうしたら、どうなる?

「どうしよう……アレイさん」

先程、生を受けた我が子を見守ることすらできぬのだろうか。気づいてしまつた別離に、逃れる術はない事も分かつてゐる。きっとこの先自分たちはずっと國から追われ続ける。もし子供たちを連れて行けば、子供も共に追われる身となつてしまつ。それだけは絶対に嫌だ。

あの子たちが本当に本当に大切だから、そんな生き方を押しつけることは絶対に出来ない。

この手で抱いて、育つところを見守つていきたい。

そんな当たり前の幸せも、手にすることはできないんだろうか? だとしたら、あの一人だけでもその「当たり前」を享受してほし

いと思うのはただの我儘なんだろうか。

「……ラック」

大きな手が肩を抱く。

いつしか流れ出した涙が土の地面に染みを作っていた。

「それは後にしよう。今はただ それより先に」

アレイさんだって悲しいのに。

いつも俺のわがままを受け止めて、包み込んでくれる。

どうしてこのヒトは、おれの欲しい言葉を知っているんだ？

「会わせて欲しい。アメジスト会つてみたいんだ」

とても穏やかな紫水晶が見下ろしていた。

大きく深呼吸をしてから「んんん、ヒノックした。
返事はない。当たり前だ。さっきまでずっとセフィロト兵がうよ
うよしてたんだから。

「開けて、ダイアナさん。おれだよ、ラックだよ」

できるだけ明るい声でそう言つと、しばらくの沈黙の後いきなり
扉が開いた。

鼻を打ちそうになつて慌てて飛び退る。

「ラック！ ああよかつた、無事だつたのね！」

飛び出してきたダイアナさんがそのままおれに抱きついた。
ちよつとびっくりしたけど、とても心配してくれていたんだろう
ことが分かつて胸のあたりがキュッとなつた。

「ありがとう、ダイアナさん……クラウドさんも」

続いて出てきたクラウドさんも微かに笑んでいた。

彼は、すぐにおれの後ろにいる黒髪の男性にもう一度にこりと笑
いかけた。

「やあ、久しぶりだね。アレイ」

「……お久しぶりです、義兄上」

「相変わらず無愛想は治つていなにようだね！」

「……久しぶりに会つた義弟への口調はそれですか」「褒めているんだよ?」

肩をすくめたクラウドさんは、心の底から喜んでいふように見えた。

アレイさんはため息をついて、それでも唇の端をあげた。

「ただ今、戻りました」

少し照れくわ畏つな笑顔は、『ウォル』のものだった。

ダイアナさんはそつと部屋の扉を開けた。

「静かにね。さつき眠つたところなのよ」

「ありがとう」

出産で苦しんだのはつい昨日のこと。体中の倦怠感も痛みも、その跡も何もかもが消えてしまつていたけれど、感情だけは変わつていなかつた。

「ただいま。ごめんね、放つておいて。でも……お父さん、連れてきたよ」

並んで安らかに眠る双子は、この先の別離など知らないだらう。ゆつくりと二人を抱き上げた。

ぐるりと振り返つて、困惑している彼に差し出した。

「じつちがね、女の子なの。田の色が紫色でね、アレイさんと一緒によう。きっと……美人さんになるよ」

まるで壊れ物でも抱くように受け取つた父親は、困つた顔をしながらまじまじとその赤ん坊を見た。

「んで、じつちが男の子。まだ田を開けたといひ、見てないんだけど……ほーり、ほっぺがふにふにだよ」

つんつん、とほっぺたをつつくと、むずかる様に手を動かした。

「へへ、可愛い。まだね、あんまり田は見えないらしいよ。でも、皮膚とか嗅覚とかはすぐ敏感なんだつて。いっぱい触つてあげてよー」

困惑しながらも子を抱いた父親は、とても優しい顔をしていた。
それがとても嬉しくて、思わず微笑んだ。

「……グレイス」

「どうしたの？ ウォル」

なぜその名で呼ぶのだろう。

ほんの少し首を傾げると、彼は紫の瞳を少し横にずらして、小さな声で、でもはつきりと「うづ」言つた。

「……あつがどう。この子たちに会えて、よかつた。本当に、あつがどう」

あつと、アレイさんの口からは聞けなかつただろう。

この子たちの成長を楽しみにして、逢う日を心待ちにしていたウォルだから。

「へへ、頑張つたんだよ」

大きな腕は、自分も子供たちもみんな包み込んでしまつた。たとえつかの間でもいい。

このまま、少しだけ夢を見たい。

刹那の夢でいい。

だつてきつと夢から醒めたら……

リビングでは、クラウドさんとダイアナさんがお茶を用意して待つていてくれた。

席に着いてすぐ、温かなカップが目の前に置かれた。

「ありがとう、ダイアナさん」

その温かさを体中に流し込んで、隣に座るアレイさんに囁くばせした。

彼の紫の瞳は、決意を映し出していた。

「義兄上、姉上……頼みたいことが、あります」

とても、とても苦しそうな声だつた。

クラウドさんとダイアナさんは、それでも優しく微笑んでいた。

「大丈夫、分かっているよ。その言葉を口に出したら、君は、君たちは壊れてしまうかもしれない」

「貴方たちはとても頑張ったの。それは、私たちが誰より知っているわ。戦いなんて望んでいないことも、ずっと平穏を望んでいた事も」

「だから、すべて任せて欲しい。大丈夫、きっと立派に育ててみせるよ」

驚いて田を見開いたアレイさんと、優しく微笑んだクラウドさんを交互に見た。

「ありがとうございます」

呆けたような言葉だけがアレイさんの口から出た。

視界が滲んだ。

嬉しいのか悲しいのか。何も分からなかつた。

安心感と喪失感が「」つちやになつて、涙と言つ形でしか具現化できなかつたのだ。

「うつ……うつ……」

口から嗚咽が漏れた。

その肩を、ダイアナさんが優しく抱きとめてくれた。

さよならなんでしたくなかったよ。

本当ほこの手で、守り抜いてあげたかったよ。

でも

残酷で美しい世界は、今日もまた鮮やかな色を見せていた。
まるでの始まりの日の朝のよつこ。

「……ラック」

「なあに？」

バリトンに振り向くと、いつものように無表情の彼が立っていた。
「一度、カトランジエへ行かないか。そこに……ねえさんが、眠つ
ているらしい」

「……え？」

一瞬分からなかつた。

「あの時、戦争の混乱で遺体が王都まで辿り着かなかつたらしい。
義兄上が手を回して、カトランジエに埋葬してくださつたそつだ。
あの、森の中の、教会に」

ああ。本当に。

クラウドさんとダイアナさんには、何度もお礼を言つたらいいんだ

るひ。

「今晚、発とう。長居すればそれだけ危険は増える」

返答できなかつた。

でも、そうするしかないと分かつっていた。そうしなければ、あの
子たちを守れないのだとわかつていた。連れて行くことはできない。
それだけは、絶対に……。

「名前、つけよう。一人に。それからさ、羽根の加護を置いていく
う。あの一人に悪魔の加護があるよつこ」

「……そうだな」

それは自分のできる精いっぴ。

自分とアレイさんが、もう親としては何も知れやれない自分たちが子供に残せる唯一のものだった。他には何も残せない。残してはいけない。あの双子を、平穏のうちに留めなければ。

「マルコシアスにしよう。名前」

「……男の方か」

「うん。マルコシアスさんみたいに強くて優しいヒトになれるよう」

「そう言つと、アレイさんはひどく複雑そうな顔をした。

「では、女の方は……ラステイミナ、といふ名にしていいだらうか」

「ラステイミナ」

その名にはつとした。

ミーナ、と愛称で呼ばれていた女性を知つていたから。

「……いいだらうか」

「うん。そうしよう……きっと、とつても強い女の子になるよ」
自分を育ててくれたヒト。ずっとずっと守ると言つてくれたヒト。
自分がすべてを賭けて傍にいる事を誓つていたヒト メフィア＝ラステイミナ＝ファウスト。

だれよりも強く誰よりも気高かつたレメゲトンの長。
胸がいっぱいになつて苦しくなつた。

「大丈夫か」

「うん、平氣……」

それでも、アレイさんの胸に頭を預けた。

今にも崩れ落ちそうだった。

いろんなことが体中を駆け巡つて四肢がぱらぱらになりそうだ。

この3日間であまりにもたくさんの事を経験しすぎて、自分の中で処理できていない。

「少し休もう。カトランジ＝なら、いへらか心許せる」

「……うん」

ただ一人がいればいい、なんていつたい誰が言つたんだろう。いつだつておれは苦しんできた。『ひとつだけ』を守らうとして、失つて。

『ひとつだけ』以外にもこの世界には大切なものがたくさんあるつて言つのに。それを全部守りたいと思つ事はきっと自然なことだと思つのに。

この残酷な世界は、この上まだおれに向をさせよつといつんだろい……？

最後にあいさつを、と思つて一人で街に出た カトランジエを出る時もさうしたよ。こ。

騎士団はすでに街から退いており、ただ無残な後だけが残つていた。でも、クラウドさんによると街から連行されたヒトはいなかつたらしい。

「おや、新顔かい？」

声をかけてきたのは忙しそうに駆け回つている大工のローストさんだつた。きっと修理であちこち呼ばれているんだろう。

「あ、ローストさん」

「何だ、俺の名を知つているのか？ どこの密だい？ あつちの方だと、キースか？ ニットか？」

「……え？」

まるで初対面のような反応に愕然とした。

「名前、なんてんだ？」

「……グレイス。グレイシャー＝ロータス」

「ほつ、そうか。グレイス、ここに越してきたのか？」

「ううん、今晚発つよ」

「そうか。気を付けるんだな。戦争が終わつてから、元グリモワール国領でも東の縁だ、この辺は特に物騒なんだ。昨日も王国の騎士どもが押し掛けて大変だつたんだ」

「……ありがと。」

「どうして？ どうしてローストさんのおれの事を覚えてないの？ 果然と何んでいると、通りかかった女性がローストさんご声をかけた。

「あら、ローストさん、美人さんだからやたらと声かけちゃだめよ？」

「おう、旅の人らしいんだ」

「マリー姉さん……」

「あら、あたしのことじ存知なかしら」
仕立て屋のマリー姉さんも首を傾げる。
本当に、おれのこと知らないみたいだ。
「あ、ありがとう。気を付けるねー！」

これ以上その場にいられなくて、ぐるりと背を向けて駆け出した。

部屋に駆け戻つてばたん、と扉を閉める。

「どうした。真っ青だぞ」

「アレイさん……」

「ああ、そうだ。」

昨日、ルシファとマルコシアスさんの光が街全体を包み込んだ事を思い出した。

「あのね、街のヒトね、誰もおれのこと覚えてないんだ……きっと、ルシファとマルコシアスさんがやつたんだ」

「何？」

「マリー姉さんもローストさんも、『旅の人かい？』って。気をつけなつて……」

あの瞬間、心臓がわしづかみにされたようだつた。
あんなにみんな、温かく見守つてくれたというの。自分とアレイさんの子を楽しみにしていてくれたはずなのに……。それも全部忘れちゃつたんだらうか？

「落ち着け」

深いバリトンにはつとした。

「もしリュシフェルとマルコシアスのしたことなら、ただお前を狼狽させるためだけにしたわけじゃないだろ。よく考えてみろ、その方が俺たちがこの街を去るのには好都合だ」

「……つつ！」

唇をかみしめた。

確かにそうなんだ。それは分かっているんだ。

思いきり、アレイさんの胸に飛び込んだ。

だつておれにはもうここしか残されていない。

「……お願い。もう一回だけ、言って？」

ずっと傍にいるつて。嫌がつても離さないつて。

「ラック？」

「お願い……」

困惑した声だつたが、すぐに温かい腕に包まれた。それでも震えは止まらなかつた。

ゆつくりと撫でながら。優しいバリトンが耳元に響いた。

「大丈夫。俺は、俺だけはお前の傍からいなくなつたりしない。ずっとここにいる。忘れもしないし、死んだりもしない。隣にいて、一番に助けてやる。永久にお前と一緒にだ。もし、お前が嫌がつたとしても……放さない」

震えが止まらない。

アレイさんが一緒に、ずっと傍にいてくれるつて言つても、子供を捨てて、みんなに忘れられて……それでもおれは、永劫の時を刻まなくちゃいけない。

だから、ここで今、誓つ。

このヒトがいる限り、おれは何度でも立ち上がる。

どれだけ辛い事があつても、どれだけ傷ついても、最後にはちゃんと前を向くこと。未来を見据えて、まっすぐに進んでいくこと

広い背中に手を回して、大きな腕に包まれて。

自分は、心の底に誓つた。

その誓いは、この先何度も何度も自分を助けてくれることになる。そして、彼は言葉通り何度も自分を助けてくれる これまでもそうだったように。

だからおれはどんな事があつても乗り越えて行けると、未来を見据える事が出来たと思ったんだ。これから旅路に不安があつても立ち向かえたし、傷を少しずつ癒すことだって出来た。

それでも、その誓いが自分の前に残酷な選択肢を突き付けてくることを、この時はまだ知らなかつた。

夜を待つて出発を決めた。

見送りは少ない。クラウドさんとダイアナさん、そしてようやく意識を回復したリッドの3人。

同時に、この3人だけが『ウォル』と『グレイス』の記憶を残している。

「リッドも知つてたんだね。おれたちの……正体」

「……ごめん。店長とグレイスが結婚したくらいに聞いたんだ」

「いや、いいよ。それよりも……ありがとう。助けてくれて」

「一人が無事ならそれでいいさ」

リッドはいつものように、子犬の瞳で笑つた。

まだ顔色は悪かつたけれど、どうやら命に別状はないもつだつた。

「んじゃあ……行くね」

「ええ。ラック、アレイ、気を付けて」

「はい。義兄上と姉上も」

「ああ、自分はまた大切なヒトとよなひあるんだな……そう思つたら、鼻の奥がツンとした。」

それを振り切つて、にこりと笑う。

「まずはカトランジエに向かうのよね？」

「うん。あの街のヒトならだいじょうぶ！ みんな優しいもん」

「そう」

ダイアナさんはぎゅっと抱きしめてくれた。

もしかするとこれでもう、覚えないかもしれないから。

ありつたけの想いをこめて。

「いってらっしゃい、ラック。でも、辛かつたらいつでも帰つてきて。私たちはずっと待つているわ」

「ありがとうダイアナさん」

ダイアナさんが母さんだつたらよかつたのに、って思ったことが

あつた。クラウドさんが父親で。

その願いは、自分の子たちによつて実現した。
きつといの一人なら、立派に育ててくれるだろつ。

すでに小さくなつてしまつた影に向かつて大きく手を振つた。
薄暗い中だから、もう向こうからは見えないだろつ。

「……行くぞ、くそガキ」

「うん」

くるりと背を向けて歩き出した。

住み慣れた街を離れて、当てのない旅に出る。

だいじょうぶ、隣にこのヒトがいるから。

子供たちの事を忘れる日はきっと未来永劫こないだろつ。きっと
罪が贖われる日も来ない。戦争を起こしたこと、敗北したこと、
多くの人の命を奪つたことも

でも、だいじょうぶ。自分は、未来を見据える事が出来る。

「コインを……探そう」

「コインを？」

「この先何があるにしても、悪魔の助力が必要だと思つ。無論マル
コシアスとリュシフェルが不足だというわけではないが……」

「コイン探して、どうするの？」

「できる限り紋章契約をする。そしてコインは、破壊する」

「……いつになく過激だね、アレイさん」

くすくす、と笑うと、軽く頭を叩かれた。

「茶化すな。これはきっと最後のレメゲトンである俺たちに残された使命だ。コインの時代に終わりをもたらすことが必要だろつ」

「なんで？」

「新しい時代が始まろうとしているからだ」

びっくりして目を大きくすると、アレイさんはいつものように無

表情で淡々と言つた。

「ミコレク殿下を中心にグリモワール再興を願う人々が動き始めて
いる」

「サンが?!」

サン＝ミコレク＝グリモワール、グリモワール王国最後の王ゲーディア＝ゼテキヤ＝グリモワールの唯一の息子にして元第一王位繼承者。

「もし、お前が望むなら……多くの悪魔を集め、その支持を得、手助けする事も可能だ」

サンが、再びグリモワール王国を作ろうとしている。

驚きで感情が動かなかつた。

「数百年前お前の先祖がそうしたように、独立戦争には悪魔の力が必要だろ?」

「うん……うん、そうだね!」

なぜだろ?この瞬間、未来が一気に拓けた気がした。
まだ何も始まつてはいないというのに。

「ミコレク殿下の居場所は義兄上に教えてもらつた……行くか?」「行く!」

気づけば即答していた。

心の奥から歓喜がわきあがり、希望が満ちていく感覚。

ああ、自分は未だ生きていていいのかもしね。

「ね、急ごう! アレイさん」
ぱつと左手で手をとつた。

その途端、軽い痛みが左腕全体を襲う。

「痛つ!」

「どうした」

「ん、何でも……ない」

気のせいかな?

血管の浮き出た左手は篭手で隠してある。

「それより、行こうよ」

「……本当に大丈夫か？」

「だいじょうぶだよ！」

朝日を背に、グラライアル平原を西へ駆け抜けた。

この時の自分は未来しか見ていないくて、自分の過去に目を向けていなかつた。たくさん情報が一度に流れ込んだせいで、その一つ一つを噛み砕く余裕がなかつたんだ。

ただ前だけを見て、隣のヒトの手を握りしめて、希望に満ちあふれていた。

世界の理じとわりとか柱とか、片割れの悪魔とか光が別つた世界とか。ルシファがおれに求めているものを知つた時、よつやくそのすべてがつながつていた事を知つたんだ

- - - わ - - - (後書き)

めつやく完結しました！

ずいぶん長くかかつてしましましたね……

完結記念に最近はやつの（もつ遅いか？）ふうぐなるものを作つて
みました。

もしよろしければどうぞ
http://lostcoin.jp/lostcoin/

いうつもまだ何もありませんが。

小説関連、あと趣味の話中心になる予定です。

「F R A U D C A L M - t a i l -」の方も近々完結します。
のち、第一幕の推敲を終えてから第二幕に取り掛かるので、続ければ
まだまだ先になってしまつと思ひます。

もし、どつかで見かけたらまたよろしくお願いします。
それでは…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3875d/>

FRAUD CALM -head-

2010年10月8日13時52分発行